住・まちづくりフォーラム かわら版

ニューズレター第16号　　2004年9月9日

特集：第16回住教育フォーラム

まち学習におけるアートの快楽

－体験と表現の結合－

財団法人　住宅総合研究財団

16

目次

開催記録　…２
趣旨説明　小澤紀美子　…３
講演１：佐藤　学　…４
講演２：楚良　浄　…10
全体討論　…16
延藤委員長まとめ　…26

第 16 回住教育フォーラム開催記録
テーマ：「まち学習におけるアートの快楽－体験と表現の結合－」
日　時：2003 年 11 月８日(土)13:30～17:00
会　場：建築会館ホール（港区芝）
講　師：佐藤　学（東京大学大学院教育学研究科教授）
　　楚良　浄（世田谷区立桜小学校教諭）
参加者：建築・教育・まちづくりなどの研究者・実務者，学生，市民活動グループメンバーなど
　　72 名

企　画：住教育委員会

委員長　延藤　安弘（NPO まちの縁側育くみ隊代表理事）
委　員　小澤紀美子（東京学芸大学教育学部教授）
　　木下　　勇（千葉大学園芸学部助教授）
　　町田万里子（筑波大学附属小学校教諭）
　　細田　洋子（建築と子どもたちネットワーク仙台）
　　奈須　正裕（立教大学文学部教授）

＊所属役職は開催当時

当日会場風景

表・裏表紙カット：町田万里子
編集・文責：住教育委員会　事務局 永田・平井・岡崎

第 16 回住教育フォーラム

まち学習におけるアートの快楽
－体験と表現の結合－

<趣旨説明>

（財）住宅総合研究財団　住教育委員会委員
小澤　紀美子（東京学芸大学教育学部教授）

イギリスで実感した日本の教育の問題点

私は大学で環境教育を担当しております。大学でも夜間の大学院や学部でやっと環境教育が始まりました。環境教育というとすぐ自然保護をイメージされると思いますが，私たちの暮らしの場をどうしていくかという基本のところを，きちんとやらなければいけないのではないかという立場でいます。

2002 年９月から４カ月，イギリスに滞在していたときに，元中学校の美術教師をやっていたアイリーン・アダムスさんの催し物に参加しました。いま，子どもたちに求められているのは，想像力とクリエイティブな力ではないかと述べていました。子どもには豊かな感受性が本来あるはずなのに，学年が上がるにつれて潰されていく日本の教育を見直すべきではないかと思って帰って来たのです。

もう１つ，私がイギリスに行っていたときに，たまたま同じ大学に文化庁から派遣されてドラマ教育を受けていた人がいたので，その方の教室に潜り込んで一緒に大学の授業を受けさせてもらい，日本と学びの文化が全然違うということを感じて帰国しました。

そして，イギリスから帰ってきて，『「住まい・まち学習」実践報告・論文集』に応募していただいた楚良先生の論文を見て，私と同じ思いだという気がいたしました。環境教育のいろいろな実践校に行くのですが，成功している学校では子どもたちの表現力がとても豊かなのです。絵で表現する。他の媒体で表現する。自分の声で表現する，というのがあると思っています。

イマジネーションとクリエイティブな力

今回のフォーラムでは，このアートの問題について，イマジネーションとクリエイティブな力をどうしていくのか。素晴らしい実践の分析を多く行っていらっしゃる佐藤先生と，楚良先生の素晴らしい試みをもとに住教育委員会で今日のフォーラムを企画しました。

私が環境教育の実践を見て気づくことは２つあるのです。１つは，子どもたちの学びが命の学びに結び付いていくことです。２つ目は，そういった学びがコミュニティの再生に結び付いているということです。そういった視点から今日はお話が伺えるのではないかと思います。

さまざまな実践から学ぶ

お２人のプロフィールをご紹介します。佐藤先生は，多くのご著書，そして多くの実践からさまざまな提案をしていただいて，私ども教員養成大学の者も非常に多くのことを学ばせていただいています。佐藤先生はご自分でいろいろな実践を見て，その中から発言していらっしゃることに私は大きな共感を得ていました。また，日本に帰って来て『子どもたちの想像力を育む』（東京大学出版会，2003 年）という本を見いだし，素晴らしい内容で示唆に富む取り組みが述べられているということで是非，この会で呼んでいただきたいとお願いして実ったわけです。

楚良浄先生については，私もいろいろな実践校を見ていますが，大都会の真ん中の学校でも，こういった素晴らしい子どもたちの表現力が高めることができる。これこそ知識注入型の学習ではなく探求創出表現型の学習を実践していらっしゃるのではないかと思います。今日はお話をじっくり伺いながら，議論し，いろいろな考え方を共有し，そしてそれぞれ実践の場に持ち帰っていただけたらありがたいと思います。

<講演1>

子どもの想像力を育む
ーアート教育によるコミュニティづくりー

佐藤（さとう）　学（まなぶ）
（東京大学大学院教育学研究科教授）

プロフィール

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。教育学博士
三重大学教育学部助教授を経て現職。専門は学校教育学
著書に『米国カリキュラム改造史研究』（1990 年東京大学出版会），『学びその死と再生』（1995 年太郎次郎社），『教育方法学』（1996 年岩波書店），『カリキュラムの批評』（1996 年世織書房），『学びの快楽』（1999 年世織書房），『子どもたちの想像力を育む』（2003 年東京大学出版会）などがある。

■生きる技法としてのアート

「アート」と「コミュニティ」がキーワード

今回，この講演をお引き受けした趣旨からお話すると，「まちづくり」，「アート」の２つがキーワードになっています。現在の教育を考える際に，最も必要なものを２つ挙げよと言われたら，私は「アート」と「コミュニティ」がキーワードだと考えています。その趣旨でこのテーマで話をしろと言われたことは非常に光栄に思いましたし，いい機会ですので，かなり自由に日ごろ考えていることをお話したいと考えています。

先ほどご紹介いただいた『子どもたちの想像力を育む』という本をつくったきっかけは，昨今，さまざまな教育が議論されていますけれども，不思議とアートについては議論されていない。一方，学習指導要領等のこの間の変遷を見ていると，明らかに芸術教科についての時間数の削減がある。例えば東京都にしても芸術関連の専科の教師を採用していません。将来にわたってアート関係の教育が，言わばリストラされている状況を迎えています。

一方，私はアメリカについても研究していますが，1970 年代にアートがどんどん削られていきました。財政難と，「学力を向上せよ」のスローガンの下で，芸術関連の教師たちは次々に首が切られていく。音楽の専科の教師がいる学校は珍しくなりましたし，美術関係の教師はいたとしても非常勤です。その美術関連の教師もファインアーツの教師はいなくなり，インダストリアルアーツに傾斜していくというように，実用性においてでしかアートが教育の中に取り込まれなくなってきた。

一方，現代の生活あるいは子どもたちの現状を見ると，いまの子どもたちに欠けているのは，みずみずしい想像力であり，豊かな感性であり，クリエイティビティー，つまり創造性です。そのような教育がなぜ欠けているのか，危機感をずっと感じていたわけです。

都市化していく社会で失われたもの

いい機会でしたので，『子どもたちの想像力を育む』（東京大学出版会）というテーマで本を書いたわけですが，この本の１節にルイス・マンフォードという人が出てきます。この人は都市社会学で有名な人で名著をたくさん残しています。このルイス・マンフォードという人は若い時に，ラディカルな子ども中心主義の学校の教師を勤めていました。実は，この学校と出会ったことが，私が教育学を研究しようと思った一番のきっかけになっているのです。そこでは子どもたちのアートが教育の中心になっていた。

ルイス・マンフォードが晩年の 1952 年に書いている『芸術と技術（Art and Techniques）』という本の１節にこういう言葉があります。「なぜ，私たちの内的生活は，これほど貧しく空虚になってしまったのだろうか。そして，なぜ，私たちの外的な生活は贅沢三昧になり，そのうえ主観的満足においていっそう空虚になってしまったのだろうか。なぜ，私たちは，テクノロジーの神様とモラルの悪魔になり，科学の超人と倫理の愚か者になってしまったのだろうか。そう，愚か者である。かつてギリシャ時代に完全な私的個人と呼ばれた愚か者」

この「私的個人と呼ばれた愚か者」は，古代ギリシャにおいてプライベート，つまり私的であることですが，もともとプライベートという言葉が何を意味しているかというと，deprived（剥奪された者）からきています。近代の人間というのは私的なものに何か充足感を覚え，家から出たところに何か疎外感を

佐藤学・今井康雄編
東京大学出版会 2003 年

覚えるわけですが，古代ギリシャにおいてはその環境は全く逆でした。パブリックな生活に参加することにおいて充足感を覚え，私的な生活において欠乏感を覚えたのです。

つまり，都市国家と呼ばれた社会においてはパブリックな生活に参加すること，具体的には政治，あるいは芸術活動，文化活動に参加することを意味したわけですが，それらは市民と呼ばれた。それに対して古代ギリシャにおける奴隷というのは，征服された民族で連れて来られた人たちと考えればいいわけですが，この人たちは芸術，文化，スポーツに参加する権利を剥奪されていました。この剥奪された生活という意味でプライベートという言葉が生まれたわけです。したがってプライベートな生活というのは家庭生活しかない。あるいは個人の生活しかないということを意味している。もともと私的というのはそれを意味していた。ルイス・マンフォードがここで言っているのは，そういう意味です。

ルイス・マンフォードは，現代の都市生活の持っている個々人の疎外状況を文明的に批判しているわけですが，これは極めて当たっていると思います。高度にテクノロジーが発達し，高度に都市化していく社会において失われているものがあるわけです。何が失われたのか。

アートを取り戻し、アソシエーションを結び付ける

ルイス・マンフォードは，第２の産業革命が必要だと言っています。その産業革命というのはアートとテクノロジーが結び付いた産業革命です。クラフト，アート，技術が分岐してしまって，技術だけが特権的な地位を占め，産業において資本の蓄積運動に伴って謳歌していった。それが現代という社会をつくり上げていったわけです。そこで失われたものはアートです。アートが失われると，なぜ人々の生活がそんなに空虚になってしまうのか。この問題を考え直す必要があると考えています。結論から申し上げると，アートはアソシエーションを準備すると思います。アソシエーションというのは人々が相互に響き合って暮らし合うような，そういう相互協同社会です。

社会をおよそ３つに分けると，１つは Civil Society と言われる契約社会。これは権利義務関係とか商業的な取引の関係において，つまり契約によって成立している市民社会です。もう一方の極にはコミュニティ（共同体）が存在します。共同体というのは歴史や文化を共有し，物語を共有している社会です。その中間形態に，より緩やかなアソシエーションがある。アソシエーションを定義するとすればそうだろうと思います。

そのアソシエーションを結び付けているものは何か。これは広い意味でのアートだろうと私は考えます。このアートは挨拶の技法から始まり，合唱団やコーラスで歌い合ったり，今日のように文化的な議論を共にシンポジウムで交わしたり，そういう緩やかな，しかしそこには必ず芸の技法というか，あるいは学術の技法も含めた意味で言っているのです。だから学会というのはアソシエーションと言いますね。そういう芸，技法，ある種の専門性を享受し会う。相互に交流し合う，そういうアソシエーションなるものが必要です。

もしアソシエーションが欠落したら社会はどうなるのか。市民社会は個々人ばらばらの，まさにルイス・マンフォードが言ったような空虚な主観生活しかない，個人の生活しかなくなるでしょう。エゴイズムがむき出しになるでしょう。一方，共同体のほうも極めて閉鎖的，排他的な共同性しか発揮できなくなってしまうでしょう。この中間形態のアソシエーションがあることによって社会は活性化し，まっとうになっていくのだと考えています。

そうすると，そこに必ず文化を楽しむ気風があるのです。例えば私はさまざまな学校の改革に取り組んでいますが，学校に行くたびにそこには必ずアートがあるのです。合唱が生まれたり，美術を愛好するような風土が生まれたり，いい学校は色を持っていると私は言っています。文化を持って，歴史を持っています。

来月行く学校は 100 人足らずの学校なのに，４年生以上がオーケストラを持っている。あるいは地域の人たちと俳句を楽しんでいる中学校もある。数え上げたらきりがないのですが，学校にひとつの文化が成立し，教育が流れ，あるいはスピリットを持って交流し合えるような瑞々しい空間になるときには必ずアートがある。結果的にあると言ってもいいでしょう。

アート，言語，市民性の教育がこれからの柱

これからの教育を考える場合に，大きくは３つの柱で考えるべきだと思っています。１つはアートの教育。２つ目は言語の教育でこれが中軸になると思います。ここで言っている言語というのは国語教育ではありません。数学や理科なども含めたさまざまな discourse（話法）です。logic（論理）と discourse が言葉を豊かにするカリキュラムとして組織される必要がある。３つ目は市民性（citizenship）の教育です。環境問題，平和の問題，人権差別の問題，つまり民主主義社会を維持し発展させていくための主人公になっていけるような，市民性の教育が柱になっていくであろう。おそらく 21 世紀のカリキュラムは，この３つの領域をトライアングルのようにして成り立つようになって，初めて教育が社会と円滑に関係を持ち，発展していけるのではないかと考えています。したがって，どうしてもアートの教育なるものをより広く定義したい。これがもともとの発想です。

ではアートとは何か。まずアートを技法として定義したい。ここで言っている技法というのは狭い意味での芸術ではありません。「術」と言ったらいいでしょうか。挨拶の仕方から始まり，喧嘩の仕方，ものの表し方，議論の仕方，自分の持っていたイメージをひとつの形にする方法もそうでしょう。あるいは人の話の聞き方もそうかもしれません。言ってみれば「型」です。あるいは「技」に当たるものだと言ったらいいでしょう。

この「型」や「技」の伝統は，日本人は非常に豊かな伝統を持っていて，世阿弥の『花伝書』は最高傑作です。あそこでは技という言葉が「態」という字で表されています。つまりそれが意味していることは自らの身の型，物事の関わり方が技なのだと言っていいでしょう。このような技法あるいはスキルの考え方を持っている伝統は，現在において非常に大きな意味を持っ

ているように思われます。もちろん日本人だけではありませんが，さまざまな文化はそれにふさわしい技法を持ち，それを豊かにすることによってコミュニケーションを発達させ，芸術や学問，社会や経済も発展させてきたのだと考えます。そういう意味で，アートとは「生きる技法」と大きく捉えています。

現在の教育はアートに行き着かない

そう考えてみると，現在の学校教育は問題を抱えていると言わざるを得ません。音楽教育，美術教育，演劇教育，さまざまなジャンルで芸術教育は行われていますが，音楽では音楽を教え，美術で美術を教え，演劇で演劇を教え，詩で詩を教え，文学で文学を教えている。これではアートに行き着きません。その詩を詩として成り立たしめているアート，音楽を音楽として成り立たしめているアート，美術を美術として成り立たしめているアートを教えてこそ，音楽教育も美術教育も本来の教育の機能を果たせるだろうと考えるわけです。

このことは誤解されないように言っておくと，芸術も音楽も美術も一緒にしてしまえという乱暴な議論ではありません。それぞれの領域に固有のアートがあります。その固有性を通しながら，しかし生きる技法，したがって芸の技法を生きる技法へと言っていいでしょうか，そういう回路を見つけ出していくこと。これが教育の仕事だと私は考えるわけです。

アートは「もう１つ」の世界を発見する技法

そういう意味でのアートというのは，もう１つの現実，もう１つの世界を絶えず発見する。あるいはもう１つの自分を絶えず発見していく作業だと言っていいでしょう。「もう１つの」というのは，いま我々が見ている現実，我々が見ている世界ではなくて，もう１つです。そのもう１つということの基盤にイマジネーションがある。このイマジネーションの力によって我々はもう１つの自分と出会い，もう１つの他者と出会い，もう１つの世界と出会う。あるいはもう１つの音と出会うわけです。

私は音楽気違いでありまして，音楽が好きというよりも，音楽にすがって生きてきた，いつも音を探しています。この音じゃないとか，ときには魅入られていきます。それは，その魅入られる音を通して世界の風景が変わり，世界の音が変わるわけです。また自分の声も変わっていき，自分の中に響く音も変わっていくわけです。おそらく芸術という仕事に携わっている人たちは，絶えずそういう挑戦を行っている。芸術家たちだけではない。子どもを含め我々一人ひとりの「人間」と呼ばれる人が，少しでも瑞々しく豊かな生活を築こうとするならば，絶えずその挑戦を行っているのだと言っていいでしょう。

まちの空気で学校の状況がわかる

さらにアートは人と人との連帯を築くし，物や人との結び付きを新たにしてくれる。絆を常に織り上げていく仕事だと言っていいでしょう。したがって，アートはアソシエーションを組織しコミュニティを活性化します。

私がこれまで訪問した学校は23年間で1,500くらいです。世界17カ国の200校以上を訪問していますから，いろいろな学校を訪問したと言っていいでしょう。実は学校を訪問すると，学校に行く前に街の空気でその学校の状況がわかってしまいます。不登校が何人いるかが本当に当たってしまうのです。いかに街というものが教育に影響を与えているか理解していただければと思います。

昨今，問題が多発している地域は限られています。日本中の学校がおかしくなっているわけではないのです。1970年代に問題になったのは世界的に都市のスラム，低所得地域でした。1980年代半ばぐらいからまずアメリカで様相が変わり，1990年代に日本で同じ現象が起きました。現在，問題が多発している地域は都市の郊外，新興住宅地です。これが極めて皮肉な現状です。

なぜ皮肉か。私の父親は銀行に勤めるサラリーマンでしたが，典型的な戦後の高度成長期の企業に勤めた人間です。その父親が生涯にわたって夢見たこと，それは郊外にマイホームを持つことでした。なぜ郊外にマイホームを求めたか。それはあらゆる親戚や地縁関係から自由になって，個人として自由な生活を築きたい。これが夢でした。これが少なくとも戦後，1970年代までの日本の多くの人々が求めた，理想的で幸せな暮らしであったわけです。実はその本質は，先ほどのルイス・マンフォードが言った空虚な生活にほかならなかった。この問題に日本の社会は直面し，子どもたちもその中であえいでいるわけです。

現実にほとんどそうです。都市の中でも商店街が残っているとか，暮らしのにおいのある地域は問題が少なくなってきている。つまり無機的な空間が人を駄目にし崩していく。人の交わりがなく暮らしのにおいがしないわけです。

コミュニティ，コモン，コミュニケーション

地域という言葉は英語でコミュニティと言いますが，コミュニティを私は３つの要素の関係で定義しています。コミュニティというのはコモン，コミュニケーション，コミュニティの３つが三角形をつくっています。コモン（共通のもの）はコミュニティにおいてコミュニケーションされることによって生まれる。逆にコミュニケーションとは何かというと，コモンなものを媒介にしたコミュニケーションによってつくられているやり取りです。今度はコミュニティというのは，コミュニケーションによってコモンなものを持っているある集団です。

現在，日本の子どもたちの７割が都市郊外で暮らしている。都市郊外の新興住宅地は，地域という名にふさわしいかどうか。コモンはあるだろうか。祭りや文化はあるだろうか。コミュニケーションはあるだろうか。問い直してみる必要があります。

「地域」と呼べない地域

昨年，東京都の近くの最も困難な小学校と中学校を訪問し，そこの改革に協力しました。小学校は葛西臨海地域で，昔は江戸の町があったのですが全部潰してビルを建て，集合住宅が林立している地域です。これはフランス，アメリカ，中南米に行っても，貧困と学校が混乱している地域は同じ風景を持っています。そういう地域では何もないのです。

その中学校は，周期的に荒れを繰り返している川崎市の学校でした。その中学校に行こうと駅で降りてもバスがなくタクシーも止まらないのです。校区に１万人ぐらい住人がいる通勤地域で，朝晩は10分おきぐらいにバスが出ていますが10時から４時までのバスを調べたら２本しか走っていない。歩いたり住民に聞いたりして調べてみましたが，スーパーやお店が１軒もない。飲み屋や食堂も１軒もない。要するにこの地域においては大人が一切コミュニケーションしていない。コミュニケーションしているのは子どもたちだけなのです。よく見ると，そこにはもちろん貧富の差もあれば文化の差もある。そういう差による衝突を経験しているのは子どもだけなのです。

葛西の小学校もお店が１軒もなかったです。子どもたちは400～500人いますから，かなりの地域だとご理解いただけるでしょう。つまり，現在の地域というのはコミュニティという名を冠するものではなくなっている。つまり地域と呼べない地域なのです。エリアです。エリアにエイリアンがいっぱいいる雰囲気です。

さまざまなものが混在してこそ地域

川崎市高津区でお母さんたちの住民運動に私は呼ばれて，お話をしたことがあります。その住民運動は，ゲームセンターを地域に残そうという面白い運動です。普通は地域からゲームセンターなんか追い出せと言うでしょう。なぜか。ゲームセンターがなくなると子どものたむろする場所が１カ所もない。渋谷に直行になります。だから地域に子どもたちがせめていられる唯一の場所であるゲームセンターを残そうという運動なのです。

私は極めてまっとうな運動だと思いました。地域にはいかがわしいものも必要なのです。これも重要です。よく筑波大学で学会がありますが，筑波大学の近くで私は飲む気がしない。必ず土浦に出て行きます。聖俗含めてさまざまなものが混在してこそ地域であり，そこに活力が生まれる。いろいろな想像力がはたらくわけです。

子どもたちに豊かな環境というのは，私はそういうイメージです。きれいに無菌状態にあるものが豊かな環境ではないわけです。醜いものも美しいものも同時にあり，それらがさまざまな葛藤を呼び，そこにいろいろな議論があり，また営みがある空間としてのコミュニティというものは，教育の場合には是非必要ですし，これからも復権していかなければいけないと考えます。そのように考えた場合に，アートの持っている意味をもう一度考え直す必要があるのではないか。私自身が関わった２つの事例を紹介しながら，アートとコミュニティとの結び付きについてお話したいと思います。

■アート教育とコミュニティづくり

日本で最初の公立学校：小千谷（おぢや）小学校

１つは1995年，新潟県に小千谷市という，小千谷縮緬で有名な町があります。人口が12～13万人ぐらいでしょうか。豪雪地帯としても知られています。ここに小千谷小学校という全校生徒800人ぐらいの学校があります。実はこの小千谷小学校は日本で最初につくられた公立学校なのです。130 周年を迎えるので，その記念行事への協力依頼が，授業改革への協力依頼とともに，校長さん及び教育委員会からありました。

日本で最初と申し上げましたが，教育史には出てきません。いま書かれている教育史は間違っていると私は思います。この学校は慶応４年につくられているのです。この地域の縮商人の山本比呂伎という豪商が，私財を投げ打って学校を設立し，生涯を学校づくりに貢献しました。当時，５人の小千谷縮商人が莫大な資産を持っていました。５番目の縮商人の家系です。

学校がつくられたきっかけは，戊辰戦争です。小千谷市から電車で30分行くと長岡市がありますが，そこが戊辰戦争の戦火でほとんど焼けました。長岡藩の子どもたちは賊徒の子どもとして生涯誰も面倒を見てはならぬ，という達しが政府軍から出るわけです。そうすると大量の藩士の孤児たちが小千谷に逃げ込んで行ったわけです。その数は200人ぐらい。不幸なことに女の子たちはどこかでさらわれてしまって，小千谷に辿り着いた子どもたちは，ほぼ100%男の子たちだけです。

その子どもたちを山本比呂伎が引き取って振徳館という学校を建設します。しかも先ほど言ったように政府のお達しは，一切の面倒を見てはいけないというわけですから，これを認めさせなければいけません。それで当時の柏崎県庁へ繰り返し直訴するわけです。ついに柏崎県庁の認可を取り付けた。つまりこれで公立学校ですが，認可を取り付けたのが慶応４年10月のことでした。明治に元号が変わるその日です。明治のスタートと同時に，まさにこの公立小学校はスタートします。もちろん柏崎県庁は当時，中央政府から承諾を得ていますので，これは文字どおり最初の公立小学校です。学制が始まるよりも５年前に生まれた公立小学校なのです。

多様なネットワークで結ばれていた各地の文化拠点

実はこの小学校は，学制前まで町の人々によって支えられて栄えます。女子の就学率が非常に高いのです。０歳から40歳までの人々がこの小学校に通っています。なおかつ東京あたりからも来ていた。当時，東京には公立小学校はありません。しかも重要なのは，ここでは国学も教えたし漢学も教えたし、寺小屋の内容も教えたし，同時に洋学も教えています。こういう意味から言っても公共，つまりパブリックな空間だった。パブリックな空間というのは文化が多様に交流し合っていることです。

その基盤になったのは小千谷市の文化と歴史の伝統でした。いまでは信じ難いことですが，日本の各地域にはこういう文化の拠点地がありました。この文化の拠点地が多様なネットワークで，現在以上に強く結ばれていたし，またそれぞれの地方の拠点地における文化，学術がいかに高いレベルを持っていたか。だからこそ九州の中津という小さな城下町から福沢諭吉が出た。想像してみてください。明治維新のリーダー，経済界のリーダーたちは，地方の小都市の文化を基盤に育ってきたわけです。その一角に小千谷もあったと見ていいと思います。

まちの人たちと学校の歴史を音楽劇で分かち合う

当時の古文書も含めて，ここの歴史が面白いのです。その当時の地方都市が持っている文化の活力に驚嘆したわけです。それが文化の公共圏，学びの公共圏を築いてきた。この歴史を何としてでも 130 周年でまちの人々と共に分かち合いたい。もう既に誰も知らないわけです。学校側もそのように考えて，合唱が好きな子どもたちですから合唱付きの音楽劇をつくりたいということで，私に依頼がきました。私の持っている文化人のネットワークでいい人を探してほしいということです。作曲は長岡の文化活動に長年にわたって協力されている三善晃さんにお願いしました。そういう企画なら喜んでと言われました。では脚本をどうするか。新しく作曲する詩を誰が書くのか。これは三善晃さんと相談して，どなたかに依頼しようと考えました。

ところが，三善晃さんに相談の手紙を何度出してもお返事が来ない。仕方なく校長と一緒にお宅に伺ってお願いしたところ，三善さんから「佐藤さんに期待しています」と言われ，これくらい冷や汗が出たことはありませんでした。そこから必死にシナリオを作り，詩を作り，果てはこの演劇の演出までしました。

アートを通して歴史と文化と明日を語る場に

その合唱の構成劇の始まりは、現在の子どもたちが風の中に声を聞く。風の音にフッと想像力で声を聞いてみる。その想像力で声を聞き合っているなかに，いきなり砲火の音が聞こえ，長岡から追われるように逃げ出した子どもたちの助けを求める声が聞こえてくる。そこで舞台が暗転して，いきなり戊辰戦争時代に立ち返るという設定で演劇空間を準備し，その中にさまざまな主題歌と合唱曲を取り入れて，最後は，「私たちは１つの音の中にたくさんの音を聞くことができる」，「私たちは１つの声の中にたくさんの声を聞くことができる」という言葉を，みんなでリフレインして終わっていく。

その間に，山本比呂伎の学校設立の言葉，これほど素晴らしく宣言した文章を私は日本の教育史の文献で知りません。学びとは何なのか，学校とはどういう場所なのか。その言葉を子どもたちが文字どおりリフレインしていく構成にしたのです。

子どもは 800 人。保護者と市民を募ったら実に 300 人以上がこの合唱に加わりました。教師たちも加わって 1,200 名の合唱団です。この学校の創立を祝う 130 周年の音楽劇の会場には 2,500 人の市民が詰めかけ，まさに祝祭空間，自らのコミュニティの歴史と文化と明日を語る空間になりました。

伴奏は市民やお母さんたちがやっています。ものすごく難しい曲を私は選んだのです。音楽が好きで凝っているものですから子どもに妥協しない。400 人もいれば何らかのコーラス経験者がいることを私は想定していましたが，市民と親が 400 人集まったのに経験者は４人しかいなかった。このときはさすがに私もびびりましたが，４人を１つずつのパートに４部に分けて，子どもたちも全部楽譜なしで口移しでやりました。それでつくり上げた合唱曲です。聞いて下さい。（合唱の録音が流れる♪）

最後の音は，子どもたちがオーケストラで即興演奏をやっているのです。そういうのを織り交ぜながら，あとは演劇を入れてやりました。三善晃さんも私と一緒に聞いていましたが，「夕焼け小焼け」の場面では，三善さんは顔をくしゃくしゃにして泣かれていました。１年生の子どもたちが，いとおしいほどでした。一人ひとりの声が響き合っているのです。１年生の子どもは顔を真っ赤にして上のCを歌っていますから，本当に一人ひとりの声が聞こえる。そういうような姿でした。

これ以後，「実は私のおじいちゃんがあそこに出てくるんだ」とか，「おじいちゃんから，このまちなくしては，自分は野垂れ死にしかなかったのだという話を聞きました」とか，まちの人々によって歴史が次々に語られていったわけです。調べてみると，それ以来，この市は児童保護においては全国一頑張っているようです。そういうように我々が知らなかったところに歴史があり，文化があり，またそれを引き継ぐべきものがある。それを１つの祝祭空間として，アートを通して共有できたことはすごく幸せでした。そういう歴史や伝統が基盤にないと，本来，学校というのは機能しないのだということを，これほど知らされたことはありませんでした。

アート中心の実践：レッジョ・エミリア

もう１つ紹介します。まちとアートが結び付いたという意味では世界で最も注目されている実践です。イタリアにレッジョ・エミリア市という人口 12 万人の小さなまちがあります。ここでの幼児教育はアートを中心にして行われ，なおかつ，このアートを中心とする幼児教育を市長や市民がすべてバックアップし，しかもアートを中心にまちづくりを行っている事例です。これは私が記録してきたビデオでご紹介したいと思います。

（ビデオ上映）

―― *レッジョ・エミリアの教育を理解する上で，教室の環境は極めて重要です。まず学校の建築空間から見てみましょう。これはディアナ幼児学校の平面図です。*

―― *玄関から入りますとピアッツァと呼ばれる空間があります。ピアッツァというのは広場という意味です。*

○佐藤　イタリアの街は必ずピアッツァを中心にして，幼稚園の中にもピアッツァがあります。

―― *このピアッツァを中心にして，アトリエが隣接しています。さらにはこのピアッツァを中心に，それぞれの教室が配置されています。それぞれの教室には２つのミニアトリエが準備されており，片方のミニアトリエは明るい空間，もう１つは暗い空間になっています。このようなピアッツァを中心とし，アトリエが備えられている学校空間は，乳児保育所でも同様です。*

レッジョ・エミリアの乳児保育所，あるいは幼児学校において，この空間，環境は極めて重要です。例えば壁を見てみますと，割れた鏡が準備されている。あるいは歪んだ鏡で自分を見ることができる。さらには３枚の合わせ鏡が準備されていて，この中に入れば，まるで万華鏡の中の世界を旅することができるわけです。それではその教室環境の豊かさを，ある幼児学校のアトリエを見ることによって確かめてみたいと思います。

○佐藤　日本は自然素材を使うのですが，こういうメカニカルな物も割合使うのです。これもとても重要です。これは明ら

かにバウハウスの影響です。

―― アトリエは，子どもの創造的な表現を引き出す豊かな道具と素材をふんだんに準備しています。自然物だけではなく，人工物も造形活動の素材となります。これらは市のリサイクルセンターから提供されています。

○佐藤　それぞれの幼稚園がアトリエを持っていますから，こういう素材が必ず子どもたちの日常の中に準備されています。

―― ここでは，子供たちが自然物を使って太陽を表現しています。こちらでは，人工物を使って町と工場を表現しています。

―― アトリエリスタ（美術教育を受け、子どもたちの創造的プロジェクトをプラン、実践するレッジョ独自のシステム）の個性が，魅力あるアトリエを構成しています。（ビデオ終了）

仕事と同じ労力でまちの教育に参画

このレッジョ・エミリアの教育というのは，子どもたちのアートの活動を日常活動の中に，しかもプロジェクトでかなり長期にわたって取り組ませる教育です。非常に感銘を受けたことがあります。我々は会社に行って仕事に打ち込みますよね。それと同じ労力で市民がまちの教育に参画していっているのです。だから，まちづくりで教育に参加していくことと，仕事を持って仕事に精を出すことと，市民として両方必要という感じなのです。

イタリア人は議論好きですから，しょっちゅう学校に集まっては議論しているわけです。しかも，ワインを飲みながらやりますから，９時ごろから始まって２時ごろまで。哲学的な話，あるいはビデオで子どもたちの様子を見て，先生たちの説明を聞いて議論し合う。子どもたちのために何ができるか，どういう環境をつくれば教育は発展するのかを議論しているわけです。

アート，創造性，コミュニケーションの教育が重用

考えてみると，これはグローバリゼーションにおいて極めて重要なことです。いま，ヨーロッパでは国境がなくなって、都市の単位，地域単位になっています。北イタリアというのは，フィンランドと並んでヨーロッパでも経済が最も活性化している所です。北イタリアの商工会議所の方の話では，世帯数の２倍も企業数がある。もはや大企業の時代ではないと言っているのです。１人ひとりの子どもが想像性を発揮して，コミュニティづくりをしながら経済活動もつくっていく。そういう時代に来ているのだというわけです。そうなったときに，必要な能力は新しいことを考えるイマジネーションであり，新しい現実を生み出すクリエイティビティーであり，コミュニケーション能力である。それらを支えるコミュニティの支援です。

例えば，この幼稚園に行ったら，ある素敵な方から「是非，ディナーに」と招待を受けました。マックス・マーラ（MaxMara）の社長ご夫妻でした。１日ともにさせていただいたわけです。マックス・マーラは昔，このまちの小さな洋裁店でした。それがなぜ成功したのか。まちの子どもたちの創造性，アートの教育が行われた。それを基盤にあのデザイン業は発展したというわけです。その時代が来ているなと実感します。

残念なことに，アジアの国々はまだまだ国境の壁が厚いし，それぞれのまち，コミュニティが国家のように自立して，ほかの国とコミュニケーションをとるという事態はまだ起こっていません。私はもう 30 年来，そういう状況はすぐ来るだろうと思っています。また，来ないとアジアは経済的にも政治的にも崩壊してしまうでしょう。ヨーロッパを見ていてそう思います。あるいは，アメリカについてもそう思います。このような新しいグローバリゼーションの社会の中において，アート，創造性，コミュニケーションの教育というのは新しい意味で有用性を帯びているということも実感したわけです。

歴史と文化、そして未来をつくるアート教育に投資

レッジョ・エミリアの市長にお会いしました。日本の地方行政で言うと，予算は現在必要なものや要求に応じてつくっていきます。これが当たり前だと思われていますが、違うのです。レッジョ・エミリア市の予算の半分は歴史の遺産の修復に使われています。４世紀以来，まちがつくられ，現在でも 12 世紀以来の都市国家の町並みを残し，教会や美術品も残しているわけです。それらの修復作業に膨大なお金が使われているわけです。もう半分，膨大に使われているものは何か。教育です。

この予算の使い方を見て，ハッと思いました。なるほど，このまちは過去と未来に投資している。いまあるまち，あるいはコミュニティというものが活力を持ち得るとするならば，ずっと生き延びて発展していくとするならば，歴史があり文化がなければ活力を持ちません。この歴史と文化を復活し，伝統を呼び起こす。もう１つは未来につなげていく。このような市の予算の使い方，政策のつくり方にひどく感銘を受けました。日本も現在は地方自治，地方分権化と言われているのですが，このように予算あるいは政策を持っている都市があるだろうか。

■アート教育とコミュニティづくりをつなぐ学校改革と地域行政

日本でもアート教育が芽生えてきている

時間も来ましたのでまとめます。アートは生きる技法であり，アートの教育こそが未来をつくっていく。しかも，そのアートの技法はアソシエーション，人々の交わりを準備し，アートによってつくられた交わりがコミュニティを活性化するだろう。

事実，現在でもさまざまな学校改革が行われています。３日前に，兵庫県西脇市という人口５万人ぐらいの小さい市に行ってまいりました。なぜ行ってきたか。レッジョ・エミリアの幼稚園が実現するようなアートの教育の企画が始まっているからです。市長も，教育長もみえて，これからまちづくりの基本政策の１つにしようという集会が持たれたのです。そういう取り組みが現在，日本の中でも芽生えつつある。これも確かなことです。そう考えてみると，アートを広く捉えること，さらにはそれとコミュニティとの橋渡しをつくること，その中心に創造性の教育が位置づき，学校と国が位置づくのではないか。そのように考えている次第です。ご静聴，ありがとうございました。

<講演2>

小さな森から紡ぎ出す総合学習
ー子ども・アート・ネットワークー

楚良（そら）　浄（じょう）

（世田谷区立桜小学校図工専科教諭）

プロフィール

1988年～1993年　大田区立の中学校に勤務

1994年～2001年　品川区立中延小学校勤務（図工専科）
在勤中，校内の小さな「中延の森」を舞台に，森と造形をテーマにした子どもの活動を実践。

2002年より現職。「子どもの育ちと造形」を研究テーマとして活躍中。

会場内がとても真剣な雰囲気なのですが，いつも小さい子どもたちを相手にしていますので，こちらも緊張し過ぎて言葉が止まってしまいます。ちょっとリラックスして，肩の力を抜いていただきたいと思います。

（レーザーポインター使用）

ここにレーザーポインターという面白い道具があります。子どもたちと，図工の授業で光遊びなどやっているのですが，ご覧になれますか。柔軟体操も兼ねて，この不思議な輪っかを見てください。映像機器を見ると遊びたくなってしまいます。もう少し暗くしていただいて，皆さん，これに付き合って追いかけてください。追いかけられますか，見失った方はありますか。いま，天井の前のほうです。天井をグルグル回っています。

こうやって，光遊びというのは面白いのです。ご協力ありがとうございました。これで体もリラックスされたのではないかと思いますので，話に入らせていただきます。

図工専科教諭という仕事

いま申し上げたとおり，私は図工専科という仕事をしています。数えると10年目になります。学校に入ったのはもうちょっと前で，中学校に6年ほど勤務しました。その中学校というのは，大田区のある生活指導困難校と言われている所でした。そこでいろいろな子どもたちとかかわる中で，私にとってとても面白い思い出がたくさんあるし，良いこともたくさんあったのですが，悲劇的な状況もたくさん見てしまいました。

卒業してからも，ときどき連絡をくれる子がいます。この7月，8月にそれぞれ結婚式に呼んでもらいました。そのうちの1人は中学校を一応卒業したのですが，非常に乱れた生活を送っていました。女の子なのですが，とても心配して，「あの子，大丈夫かな，どこに行ってしまったかわからないのではないか」と思っていたら，結婚式の招待状が届きました。行く前もちょっとどきどきして，大丈夫かなと思って行ったのですが，とても立派に成長して幸せそうな結婚式でした。環境が非常に難しい地域ですので，この先どうなるのかという心配はあります。

もう1人は，私とは美術，アートとのかかわりでずっとつながっていました。中学校卒業と同時に，都立芸術高校，東京芸術大学と進んで，今年，東京芸術大学の助手になったT君という人がいます。いま，私の家の傍で画廊を借りて展覧会をやっているようで，行くのを楽しみにしています。

そのような背景があり，いろいろな子どもたちとの出会いで，私も「こういうことをやっていかなくては」と励まされながら進んでいます。いろいろな批判も受けることはあるのですが，佐藤先生のお話の最初にあったとおり，私たち芸術教科というのは本当にリストラの危機に頻しています。頑張らないと職を失うという，大きな，現実的な問題と日々立ち向かっていかなければいけません。もし，リストラに遭ったら自分で会社でもつくって，子どもたちの育ち，環境のために，世の中の人が応援してくれるような仕事をやってもいいかなと思っています。

話ばかりしていても面白くなりませんのでビデオをお願いします。今日はビデオとスライドを見ながらお話しようと考えています。

世田谷区立桜小学校と前にいた品川区立中延小学校の話が半々程度になります。今日は広い範囲でお話をさせていただければと思います。

（ビデオ上映）

日常的図工生活

なれないパソコンの編集に挑戦し，1週間前にやっとビデオ編集ができあがったところです。砂場遊びもやれば，絵の具でどろどろペイントしたかと思うと，光遊びもやり，パソコンも触らなければいけないという教え子たちです。私のパソコンのキーボードには絵の具がベトベトついています。

「理科室の造形」という活動です。去年，桜小学校で展覧会をやりました。図工だからといって図工室ばかりでやっているのではありません。いろいろな所に出ていってやります。理科

の方にはちょっとひんしゅくものでもあるのですが，蛍光塗料を中に入れて紫外線を出したりとか，いろいろやっています。

同時に公開された５年生の段ボールの造形では，「表裏一体」をもじって，裏と表の模様をうまく活かして立体を作り，「表裏立体」というタイトルを付けました。

「逆さまの天井歩き」と言って，天井にいろいろな造形物を作ってぶら下げ，鏡で遊びます。とても面白い感覚です。天井を歩いているような錯覚に陥ることができます。

２年生が作った素敵な帽子，衣装，手づくり打楽器をお披露目するため，簡単なサンバの曲に合わせて校庭を練り歩くということをやっています。展覧会をやっていた多くの方たちも参加しています。

２年生が初めて図工室に来たとき，「宇宙人の絵」というものをやるようにしています。30 分程度，宇宙人についての議論が活発に行われます。「宇宙人，見たことある？」と２年生に聞くと，「はい」と手が挙がって，みんな「僕の見た宇宙人はこうだった」，「私の見た宇宙人はネズミ色だった」，「いや，私は青色だった。指が４本あった」とかいろいろなことを言うわけです。今年も誰一人として，「宇宙人なんていないよ」と言う子はいなかったのです。こうやって絵が出来ていくわけです。

暗い教室に行って，光遊びをやっているところです。音楽に合わせて動かした光がデジタルカメラに記録され，光の線として写るわけです。とても美しい線がこの活動が終わってすぐ，ディスプレイに映されて見ることができます。

３年生と５年生で行っている「机の上の顔」です。机の上，下でもかまいません。身の回りにある，ありとあらゆるものを使って行います。これもデジタルカメラに記録し，あとでスライドショーで見るなどして振り返るわけです。実際に作ったものを歩き回って，みんなで見る時間も大切な時間だと思います。狭いのですぐ壊してしまうわけです。

前任の中延小学校の展覧会では，自動車に，宣伝カーということでペイントしました。私の兄がレンタカー会社に勤めていて，ただで借りた廃車になる５日前の車です。ペイント代が１万円かかっています。警察の許可を取らなければいけませんので，交通課というところに行って許可を取ります。お巡りさんがいろいろ言ってきて，警察で大喧嘩になるという大変なハプニングがあり，校長先生がなだめてくれました。

外での造形活動，「夢のマイホーム」です。先ほどの佐藤先生のお話で，「夢のマイホームは悲惨な現実と直結している」という話を聞き，この次にやるときにはネーミングを変えたいと思います。実際には保護者の方たちと一緒になってやっています。中には一生懸命になり過ぎて，「子どもたちはちょっとあっちに行ってなさい」という方もいて，どうかなと思いました。

校内展覧会で光と音と映像のパフォーマンス

（ビデオ映像『展覧会の絵』演奏）

音楽の先生と担任の先生の協力を得て行った光と音と映像のパフォーマンスをご紹介します。

展覧会でやったので，『展覧会の絵』という曲のフレーズだけをうまく活かして，それにシンセサイザーや手づくり打楽器などで音を出しています。練習をかなりしました。もともとは子どもたちのものです。ノコギリによる演奏とか，「エレキ・ノコギリマシーン」などというのも開発しています。いろいろな手づくり打楽器も工夫して作っています。体育館の中に作品がいっぱいある中で，舞台などを使ってやっています。舞台の下のところに，子どもたちが鮨詰め状態で座っています。

コンピューターの「お絵描きソフト」を使って映像を作り，それにシンセサイザーなどで音を付けたりもしました。

映像が同時に楽器になっているのですが，横に流れる画面が出てきたら，オーケストラで言うチューニングのような音を出そうということは決めてありました。そして，暗くなったらやめる。最後は電気仕掛けのバスケットゴールが下りてきて，そこに大きな顔が映って終わりというものです。

地球上の人間全員が相手

もう８年も前になってしまいますが，品川区の「海外研修制度」の試験に運良く合格し，アメリカの学校に滞在する機会がありました。担任の先生から，最後の日の最後の時間に是非授業をやってみないかと言ってもらい，「光の授業」をやってみました。アメリカの学校というのはもっと自由奔放で，みんな走り回っているような姿を想像していたのですが，予想に反してしつけが厳しく，他人の話を聞いたりということに長けている。お客さんだからということもあったのかもしれませんが，子どもたちもよく活動してくれました。

子どもたちの反対側に，姿見のような大きな鏡が置いてあり，自分の姿が見えるわけです。自分で展示したものと，自分の身体が重なって動いたりという面白さを体験しようというわけです。

このときにとても強く感じたのですが，私たちがいつも学校で活動していると，日本の子どもたちについてどうしなければいけないか，日本の教育はどうあらねばならないかということを常に議論したり，考えたりするわけです。あのアメリカで活動をさせていただいて，私たちが相手にしているものは地球上の人間全員を相手にしているのであって，日本だけで考えているのはちょっと視野が狭かったかなということです。以後，そのような考えに基づいてやっています。

様々な行事や中学と協力・連携して

日光に林間学園というものがあって，毎年行っていました。折角図工の先生がいるので，何か変わったことをやってみたいということで，これはパフォーマンス的なことを取り入れたキャンプファイヤーの様子です。このときも手づくりの打楽器などを持っていって，仮面など作りました。

学芸会も全面的に協力して行っています。中国からの転校生があったクラスがあって，言葉が通じない，どうしようということで研究授業をやったり，精一杯の努力をしました。秋の学

写真１

写真２

写真３

写真４

芸会では『孫悟空』をやってみようということになり、図工の時間に協力して，前宣のようなアニメーションを作りました。当時，もう４～５年前になりますけれども，「ディレクター７」というソフトを使って，子どもたちのアニメーションを継ぎはぎして編集しました。たった１分ちょっとのアニメーションを作るのに，20 時間ほど費やしました。「お楽しみに」と出たところで幕が開いて，中国語の説明が始まるわけです。

中延小学校の最後の２年間で，小中連携教育にも取り組みました。隣にあった荏原第二中学校は中学校にしてはとても小規模だったこと，熱心な美術の先生と，校長先生も元美術の先生ということもあって，もともと顔見知りでしたので，ちょっと面白いことをやってみようではないかということになりました。通常、小学校と中学校の溝はとても深いものがあります。めったなことではこのように共同で授業を計画するなどできません。いま，「やれ，やれ」と言われているのですが，なかなか自主的にやるということは難しかったのですが，あえて挑戦をしてみました。

蛍光色の絵の具を水に溶かして，ペットボトルに入れ，いろいろなものに組み合わせて１つの小さな準備室を，「海底遺跡」というタイトルで作りました。中学校３年生の選択授業でしたので，わりと好きな子が集まっているということもあります。これは今日会場に見えている，当時荏原第二中学校にいらした鹿倉先生が中心になってやった授業です。

（ビデオ上映終了）

小さな森の物語り－中延小学校の校庭で－

○写真１　中延小学校の校庭の隅にある小さな森です。森というと広大な敷地を想像される方もあるかもしれませんが，そうではありません。長い方が 50 メートルぐらい，奥行きが 25 メートルでしょうか。そこに大きなくすの木があり，学校のシンボル的な存在になっています。「品川百景」の中にも選ばれています。毎日学校で生活していると，時には「これがなければ，もう少し広い校庭が確保できるのではないか」というような，いろいろなことを考えてしまったりするわけです。ですがやはり，地域と学校との結びつきをつくっていく上で，こういうものはとても大事だなと痛感するようになりました。ここで起こったことをご紹介したいと思います。春になると桜が咲いたり，菜の花が咲いたりします。

○写真２　図工室が狭かったので，この森に出ていって写生をしたり，いろいろなことをやりました。これは４年生の作品で，縦穴式住居の周りの木をスケッチしたものです。

○写真３　飼育小屋に鶏やうさぎがいます。私はずっと飼育委員会の担当をしています。この絵を描いた子が飼育委員会に入っていて，鶏にはとても愛着があって，「スケッチしておいで」と言ったら，「鶏を出してきていいですか」と，鍵を開けて外に出しながらスケッチをしていました。

○写真４　これは「カラスが落っこちた」という絵です。ご存じのとおり，カラスは春から夏にかけて，子どもが育っていく前に飛行訓練をするので子どもが落っこちてくるわけです。要するに子どもを守ろうとして，親ガラスは子ガラスに近づく者を攻撃するのです。綱が張られ，立入禁止となるわけです。

このときは落っこちてきた場所が大変に悪く，非常に危なかった。いまはこうやって笑って話せますが，とても深刻な問題になって，この１日はそれで大騒ぎでした。

次の日，「昨日は大変だったね，今日はカラスの絵を描こう」といってカラスの絵を描いていました。年間の指導計画があるのですが，図工の場合は指導要領の中で同じような題材であれば，急遽，子どもの印象の強いものに取り換えるということを柔軟にやっていく自由さがありました。

○写真５　「落ち葉でコラージュ」です。タイトルも日によって「葉っぱ人間」とか，いろいろなことに変わったりします。葉っぱを厚紙に貼って，それをコピー機にかけると黒と白のコントラストのはっきりした，ものすごく面白い画面が出てきま

写真５

写真６

写真７

写真８

す。それに白い絵の具で色を付けたというものです。

地域の中の学校を実感

○写真６　「ウォーターパラダイス」です。水道パイプにポツポツ穴を開けておいて，ホースにつないで水を出す。みんな，ものすごく熱中してやります。小学校にも冷房が入るようになってきましたが、とにかくほとんどの子が冷房のない生活は考えられないという時代です。７月から９月というのは，学校には暑い所に慣れる訓練に来ているような面があります。それもいいのですが，図工でいろいろなことができますので，このような活動を取り入れています。

このときに，水道パイプの業者の方が大変に熱心にかかわってくださいました。聞くと，その水道屋のご主人も中延小学校の卒業生だったようで，学校にはとても愛着を持ってくださっていたのだということがわかりました。わざわざ若手の方を１人派遣してくださって水道パイプの穴の開け方，ガスコンロでどうやって曲げるかといったことを根気強く，丸１日かかって教えてくださいました。派遣された方も，「今日は仕事なしでこのようなことをやっていられるのか。子どものころ，このようなことをやらせてもらえばどれだけ幸せだったか」など，ボヤきながら１日付き合ってくれるわけです。それが地域の中での学校というか，コミュニティをつくっていく上でとても大事なものでもあり，それがホッとする，やりがいを感じさせてくれる一場面でもあるわけです。

ひょうたん池の上にできあがった水の作品をを１日出しっ放しにしておいて，帰るときにみんな橋の上を通って水浴びをしながら帰るという，自由なことをやらせていただきました。

表情をご覧いただければわかるとおり，子どもたちはとてもいきいきとしています。暑い中，教室で汗をかきかき勉強するよりはこのほうが面白いに決まっているわけです。このときの図工の持ち物は「水着」でした。

野焼きの作品を竪穴式住居で展覧会

○写真７，８　これは野焼きの模様です。野焼きは昔は珍しくなかったのですが，ダイオキシンなどの問題で学校では一時期敬遠される方向になっていました。ですが，「総合的な学習の時間」などが導入されるにしたがって，環境的な学習をすることと図工の作品づくりとがリンクして行われ，また盛んに行われるようになりました。４年前の時点ではあまり行われていなかったので珍しかったのでしょうか，新聞社の方とか，教育委員会の方まで野焼きをやるということでお見えになりました。以前もこういうことをちょくちょくやっていたのですが，時期が時期だと注目を浴びるようなことになってしまいます。

写真９

もっとも，内容的にはだいぶ違っています。例えば，家庭科の時間に作ったパン生地をここで焼くなど，１日中，作品を焼かない学年もいろいろな形で野焼きに参加しています。結局１日中，この学校のイベントのようになったわけです。

「縄文土器を作った小学生」などと新聞には報道されてしまったのですが，そうではありません。あくまで図工の時間に作ったもので，これは現代の土器です。調整方法は縄文時代のものと共通したものがあっても，今の子どもたちは今を生きる表現者として物を作っているという１つのこだわりがあります。自分の好きな形，徹底的に面白い形にしようというものです。

作品がいろいろできて，これを縦穴式住居などに展示する「ミニ作品展」を行いました。土偶などを見て作るのですが，やはり現代の作品としてちょっと面白い，キャラクター風の表現が取り入れられています。できあがった植木鉢に植物を植えて，屋上に置いたりして，みんなで鑑賞しました。

展覧会場として活躍した竪穴式住居は，地域の工務店の方に協力していただいてつくったものです。たまたま，ＰＴＡの会長が建築関係の方でしたので，その方が知り合いの業者に連絡してくださって，とてもこの予算でできる金額のものではないのですが，「学校でやるならしょうがないな，一肌脱ぐか」ということで，赤字覚悟で作ってくれました。これを基にしたいろいろな学習も行われています。

「中延の森大作戦」

校庭の森をより良い所にしようという，５年生だった子どもたちの「中延の森大作戦」という活動を紹介します。担任の先生を中心に展開された学習の一環です。

○写真９　森の模型を作り，ここに自分たちで何か新しいものを作ろうと考えていくわけです。最初はこのようなことをやったらいいのではないか，このようなものを作ってみたらいいのではないかというアイディアを出すことから始まりました。自分たちが作りたいものを作ってしまっていいかというと，このクラスだけの問題ではなくてほかのクラスに了解を取らなくてはいけませんし，教職員にも理解をしてもらわなければいけません。思いのほか学校全体の，特に教職員の方たちの反対が強い。「君たちのクラスだけのものではないのだ」ということで，猛反対にあいました。校内研究の公開授業で，この子たちと先生たちとのバトルが繰り広げられている授業があったわけです。私たちはこんなことを考えて森をこのようにしたいということから始まって作られ始めた会議でした。ただ，先生たちは，そこにブランコができてしまったらほかの子たちが遊ぶときは危ないではないかとか，いろいろなことが言われました。

臨時の職員会議が何回か開かれ，私たちも１人ひとり先生方を説得して，決してこのクラスだけのわがままではない。学校全体にとって価値あることなのだ，ということを説得し続けました。その職員会議では過半数を超えた程度だったのですが，遂に了解をしていただき，「中延の森大作戦」が進行することになったわけです。

写真 10

写真 11

写真 12

○写真 10　これは「うさぎの遊び場づくり」です。飼育委員会の子たちがいましたので，その子たちのアイディアが多かったのです。植木屋から大きな丸太を譲り受け，この協力もありがたいものでした。協力していただいた方として，隣の中学校の技術・家庭科の先生がもともと園芸が専門ということで，皮をむいたりタールのようなものを塗ったりする技術指導に来てくれました。そのようなことでも，人の輪が広がっていったということが印象的でした。

ここで遊ばせていたうさぎが，世話をしていた子がぶつかって死んでしまったということがあり，この小さな森の中に本当に小さな石で作ったお墓があります。最初のうさぎは「ティモシー」という名前だったのですが，次に買ってきたうさぎが，すぐに「ティモシー二世」という名前が付いたので，そのお墓には「ティモシー一世の墓」と書いてあります。毎日のように，その季節に咲いた花などが備えられたり，水がかけられるなどしていました。休み時間などに行ってはうさぎの墓参りをする子どもがたくさんいました。

飛躍しますが，お墓というのはとても大事なものではないかと思います。特に人間が，頑張って明るく生きなさいと言うことは多いのですが，人間だけではありません，動物の死に対して，私たちが認識する機会というのはとても少ないと思います。そういった意味では，生命の尊さを実感するという意味で，お墓を作るというのはとても良い事だったと今でも思っています。

○写真 11　これはデザインされたひょうたん池です。これも実現してよかったと思います。中に仕切りがあり，ザリガニなど，魚が共存できるようなものになっています。ひょうたん池で，「手づくりクラブ」というクラブの子が船を作って浮かべたりしています。

学校外との連携も子どもたちの成長につながった

森の活動を行うに当たって大変協力していただいた方がいらっしゃいます。仙田考さんという，環境デザインを専門とされている方で，当時，イギリスの大学へ勉強に行かれていましたが，たまたま短期滞在で戻ってこられたときに，この話をしたら「協力しましょう」ということで，学校にちょくちょく来てくださっては模型づくりから，先ほど言った会議にも参加してくださいました。何回か来ていただいたあと，イギリスに帰られてしまったのですが，ちょうど 12 月の時期，子どもたち向けにクリスマスカードをいただくなどしました。外国から郵便をもらうなど，ほとんどの子にとっては初めての体験で，それだけでもうれしかったのですが，自分たちの活動を地球の裏側から支援してくれる人がいるというのは，子どもたちも私たちもとても感動しました。大好きな体育の時間だったのですが，ちょうど郵便屋の人が郵便を届けに来たとき，「クリスマスカードが仙田さんから来たぞ」ということで体育の授業が中断し，みんな校庭でそれを順ぐりに見たりしました。こうやっていろいろな活動を展開していく上で，学校以外の方たちと連携していけるというのがとても励ましにもなり，また子どもたちの成長の助けにもなることをとても実感しました。

○写真 12　「光のワークショップ」です。いまから３年前になりますが，12 月，クリスマス前にＰＴＡの主催で「ウインター・フェスティバル」というお祭りが計画されました。冬のお祭りですから，滅多に集まることのできない夜に子どもたちが集まって光遊びをしたり，ＰＴＡの方たちは焼きそばを焼いたり，いろいろな飲み物を準備したりしてくれました。先ほどの大きなくすの木にイルミネーションがともされ，このＰＴＡ会長が建築の方だったので仕事に使うクレーン車を持ち込みました。３階建ての屋上よりも背の高いくすの木に 3,000 個のイルミネーションを取り付けることをやってくださいました。

縦穴式住居の中は目玉の光遊びをやりました。ブラックライトに照らされた目玉が無気味に，縦穴式住居の中で光ります。

○写真 13　ペンライトを動かすと，光の線がデジタルで記録されるものです。集まった 60 人の子どもたちが一斉に，ペンライトを音楽に合わせて夜の校庭で振り回しているところです。

６つぐらいのワークショップを校庭でやりました。アサガオの栽培に使った棒と輪があって，それを逆さまにして電球や綿，セロファンをくっ付けた作品です。

森の活動については以上です。少し日常的な，図工およびその他の活動でちょっとご覧いただきたいと思います。

写真 13

写真 14

写真 15

写真 16

造形することの価値を認識する

○写真 14　図工室の真上が屋上なのですが，そこで学校に入った１年生が初めて，開放的な気持で絵を描くという活動です。

○写真 15　これは我が家の７歳と４歳になる娘です。良いのか悪いのかわかりませんが，この子たちは私の実験台のような生活をしています。面白い題材を考えると，この子たちでまず土日に実験をしてみて，一生懸命，面白がってやると，大体学校に持って帰ってやる。「学校に持って帰る」というのは，学校を中心に生活している感じですね。家にときどき行って，材料を仕入れて学校に戻るという生活です。これは単純な積み木遊びです。子どもの積み木遊びというのはとても興味がありまして，作っては壊し，作っては壊し，要するに再生していくものなのです。そこに成長の様子がうかがわれ，子どもが造形することそのものの価値みたいなものを認識することができるわけです。昔は路地裏で，道路に子どもが絵を描いたりしたものが一般にも見られたのですが，それが最近ではなかなか見る機会がなくなってしまった。家庭の中でしか見られなくなってしまったという問題があるわけです。

○写真 16　桜小学校のものです。ペットボトルを１個ずつ持ってきてもらい，それに好きにサインペンでお絵描きをし，プツプツと錐で穴を開けます。ちょっと面白い格好をしていますが，外に出て水道から水を汲み，口をつけてプーッと吹くと，水が吹き出てとても面白い状況になるわけです。体育の邪魔になって迷惑がられたのですが，とても面白かったです。ずぶ濡れになりまして，几帳面なおうちのお母さんは，担任の先生から「今日，濡れちゃったのです」という連絡を受けたら，着替えを持ってゾロゾロ来ました。放っておけば乾くのですが，この姿が見たいというのもあったのかもしれません。表情を見て下さい，すべてを忘れて，水を吹き出させているところがおわかりいただけると思います。

○写真 17　粘土遊びです。１～２年生のころは，このようなものを作ろうということは強く言いません。とにかく，粘土に触っていると気持いいということを大事にしながら進めていきます。中にはだんだん，自分のイメージに合わせて具体的なものを作ろうという子もいます。細長くしていって，積み上げて渦巻き状にすることで，最後に付け足しのように，竜の首のように付けている。要するに粘土に触っていて開放感に浸ったり，触覚を使った活動というのはそれだけに究極的な意味を持っているわけです。３年生の後半になると，具体的なものが作られる傾向はあります。それでも，やはり，ひたすらこねていたいという子もいました。２，３年生の段階では，ここまでできなければ駄目というような評価はありません。５年生になると，針金とか，木などいろいろなものを組み合わせて作っています。

○写真 18　春先に毎年，消防自動車がやってきて，消防自動車の撮影会というのがあります。コンピューターを使って，デジカメで撮影した消防自動車や消防士の様子をパソコン上で組み合わせ，作品にしようというものです。消防署の主催する作品展に応募して，消防総監賞というものをいただいた５年生のコンピューター・グラフィックスの作品です。

卒業式の前には自画像をコンピューターで作品をつくります。

○写真 19　歯磨き粉で机に描いてしまいました。夏は暑いので，絵の具だけだと取れなくなってしまいますので，歯磨き粉を混ぜた絵の具でこうやって机の上に描いています。あとで雑巾できれいに取れますので，何の問題もなく片づけられるというわけです。教室中にミントの匂いが立ち込めて，とても気持のいい，爽やかな夏の一場面でした。

○写真 20　これは林間学校でやった肝試しのグッズです。子どもたち１人１人が一生懸命作った目玉が，美容院から譲り受けたマネキンの首に貼りつけられています。暗いほこらに置かれた，この顔に目玉を貼りつけてくるというのが１つの課題であります。これが肝試しになって，これをやりに毎年，林間学校に行っていたようなものです。

○写真 21　そこから発展した図工の作品です。目玉の作品です。目玉を自由に，いろいろな形でこのように表現しています。

(パワーポイント終了)

ご紹介したいことがたくさんあり，かなりギュウギュウ詰めになってしまいました。まず子どもたちの豊かな活動というか，子どもたちの存在そのものが，社会の宝であるということを感じて頂ければと思います。ご静聴ありがとうございました。

写真 17

写真 18

写真 19

写真 20

写真 21

<全体討論>

講師：佐藤　　学
楚良　　浄
コーディネーター：奈須　正裕
小澤紀美子
ファシリテーショングラフィック：木下　　勇
町田万里子
細田　洋子

○木下　　皆さんから書いて頂いたカードが10点以上ありますが，それを大まかに分類しました。大きなところでは，アートとまち，コミュニティとの関連。もう１つ多かったのが，評価はどうするのかということ。これは図工教育や表現の教育で常に議論になっているところだと思います。最初に今日の主題である「アートと，まち，コミュニティ」からいこうかと思います。

東京大学の細田さんから，「コミュニティのない地域の学校をどう捉えますか」という質問です。これは佐藤先生の話の，コミュニティがない地域の学校を，今日のテーマのアートとどう関連づけるか。それから，川越さんから，「効率優先でアートが根付かない社会の現状に対し，どうすればよいか」。森山さんから，「学外から授業や行事に参加されることについて，どうお考えですか」と。この「学外」の意味は，これも「地域の」ということでよろしいですか。地域でアートが根付かない，またコミュニティの実態がないところでどうしたらよいか。

まず佐藤先生に，効率優先でアートが根付かない社会の現状や，コミュニティがない実態の地域社会において，どのように取り組んだらいいかについてお願いします。

学校がコミュニティづくりの中心に

○佐藤　　大問題ですね。まず第１に，コミュニティのない地域の学校をどう捉えるかということですが，これはもう学校がコミュニティづくりの中心にならないとほかに道はないと思っています。よほど地域の特性がないと，学校づくりを通してでしかコミュニティの再建ができなくなっているのです。しかも，意外なほど学校というのは，コミュニティをつくる潜在的な可能性を持っているのです。例えば阪神・淡路大震災のときに，結局コミュニティの再建の拠点は学校だった。どの地域でも，地域の中のいちばんいい所に陣取っているということもあって，学校を中心にコミュニティの再建を図るしか，その地域の未来はないと断言していいのではないでしょうか。

その発想に立ったほうが，現実にはコミュニティづくりは進むと思うのです。ところが，いろいろな地域的な状況があって，反学校でコミュニティをつくるという方法もないわけではないのですが，これはほとんど1970年代に失敗したと思うのです。さまざまな人々，意見も異にする人々が，やはり活動を共にしていくという，そういう空間を準備しなければならない。その空間をいまのところ最も準備できるのは学校である。ただ，この認識は地域にも，教師たちにも定着していないわけです。ですから，その学校づくりを地域づくりと一緒に考えていくということを政策化しなければいけないと思います。だから，個々の学校でやる意味の範囲があって，それはもちろんできることというのはたくさんあるのですが，より強力に進めるためには，地域政策が必要なのです。すでに私は，あるいくつかの市において，そういうことを始めているのですが，市のまちづくり政策の中心に学校づくりを置き，そこでのネットワークを基盤にまた考えていくという，そういうまちづくりのモデルをいまつくりたいというのが１点です。

コンビニ文化ではアートは根付かない

○佐藤　　それから，アートが根付かない地域の現状という問題ですが，これも地域差があるのです。離れ小島とか僻地に行くと，いっぱいアートがあります。つまり，職人がまだいるのです。私も一時期，中学校時代，瀬戸内海の孤島にいたことがあるのです。行って驚いたのが，アートがふんだんにあるということです。要するに大工のおじさんが油絵の画家だったりするわけです。１つのコミュニティがあるところというのは，必ず職人の文化があるのです。この職人の文化があるところには，アートが非常に生きてくるわけです。そういうところは，私はまだあると思うのです。それは発掘していけばいいことだし，それをつなげていけばいいことですが，問題は，さっき言った無機的な空間における地域です。コミュニティもなければ地域もないというところでは，本当に生活が貧困になっているのです。子どものころあった，皆さんも経験あると思いますが，要するに何でも売っているお店屋さん。小さな店で，田舎だったら必ずあったのです。ハサミなど買いに行くと，20種類ぐらいある。入れないぐらい狭くなっていて，物が詰まっているのです。パンツひもだって，５種類も６種類もある。チャックだっていろいろあるというふうな，そういうお店屋さんがありましたでしょう。あれをフッと思い出すのです。要するに暮らしが複雑だったということなのです。それだけ手の技も複雑だった

し，暮らしが複雑。つまり，それをアートと呼んでいるのですが。そういう基盤がないと，どうも教育というのはうまくいかないですね。子どもがそういう部分から親しんでいないと駄目だと思うのです。ところが，いまのはもう典型的なコンビニ文化であって，簡単に言うと，コンピューターの情報によってコントロールされている文化です。在庫はない。すべて計算しつくされた最も単純化された文化。文化という名にふさわしくない文化です。

アートは人の秘密の部分からでてくる

○佐藤　もう一方では何をするかということが問われていて，今日楚良さんのお話を聞いて，そうだなと思いながら聞いていたのですが，結局アートというのは遊びなのだということなのです。楚良さんの中に一貫しているのは遊びなのです。この遊びのセンスというのはすごく重要で，これをどうやって仕掛けていくかだなと，１点はそれを思ったのです。

それは子どもの問題ではなくて，大人の問題でもある。そういう大人が遊ぶ空間とか遊ぶ仕掛けというのをつくっていかなければいけない。これが１つです。ただ，いまの遊びだけでいくと，圧倒的に消費文化に流されてしまうというか，何か表現が表現になっていかないのです。

これがもう一方で起こっている現実で，そこの部分とどう立ち向かうかということですが，私は，アートというのは，人の秘密の部分から出てくると思うのです。これが非常に微妙なところがあって，１人１人の秘密の部分がきちんと表れてくる，「あっ，恥ずかしい」という感じの。そういう交流がないと駄目なのです。だから，カラオケはアートではないのです。ああなると駄目なので，何かちょっと恥ずかしさを持ちながら寄り合うような，そういう場の設定というのが必要かなと思います。だから，学校教育の中で，音楽教育とか美術教育でいちばん気に入らないのは，その秘密を出させないことです。元気にやりすぎる，もうちょっと密かにやったほうがいいのです。何かパフォーマンスをやってみると，普段何にも言わなかった子が，すごく違う面を見せてくるとかいうのがあるではないですか。そういうのがすごくよい。

先ほどの小千谷の演劇の役柄を決めるのに，800 人でオーディションをやったのです。拍手で選んだのですが，そのとき選ばれた子は，皆普段目立たない子なのです。つまり，見ているキャラクターが，いつも見ているキャラでは何にも面白くない。普段何にも言わなかった子が，急に，何かドキッとするような言葉を発してしまうみたいな，で，本人も，あっと口を押さえてしまうような，そういう部分をもっと大切にする教育や仕掛けが必要かなと思います。

だから，キーワードは「秘密」なのですが，そういう秘密がすり合わされていくような仕掛けがあれば，絶対流されないのです。商業主義的文化とか，型にはまったものとか。だから，これは何か，すごく私のイメージだと，１つはちょっとずれたところでやるということと，もう１つは，何か恥ずかしげにやるという，大っぴらにイベント的にならないというのか，イベントはイベントですが，イベント的にならないイベントの組み方というのが知恵としては必要かなと思います。

○奈須　いきなり本質的な話が出てきました。

美術室が先生も子どもも創造しているアトリエ

○木下　苅宿先生から，「アート教育と社会との媒介者としての教師の関係はどうでしょうか」という質問がありますのはどうでしょうか。

○佐藤　いい質問です。授業をいっぱい見てきたのですが，すごく感動した美術の授業というのはいくつかあって，それは共通項があります。何か美術室がアトリエになっているという感じ。そして，先生もつくっている。先生も創造していて，何かその周りで子どもたちが一緒にやっているというのが，何か非常に理想的な感じがするのです。私の話に引き寄せて言うと，テクノロジーとアートとアカデミーを分岐したのですが，その前にあった，つまりミケランジェロなんかが作っていたころの工房に近い感じが，すごく素朴でいいなと思っています。教師というのはすぐ教えなければいけないから，また，それも投げ出しては駄目なのですが，でも，いちばん基本に，教師も作っていて，子どもも一緒に作っていてみたいな。それで，教師の真似をするのですが，真似にならなくて，子どもの別のものが生まれてしまったみたいな，そういう感じのつなぎ方がすごくいいかなと思っています。また，そういう授業も若い人たちはもうつくっているという感じがするのです。

遊び心はどこからくる？

○奈須　ありがとうございました。今度は楚良先生に伺います。佐藤先生のお話で，アートは遊びだという話，あるいは遊び心だというのを川越さんが出してくれています。あと，いまのコミュニティを形成するのは学校だということ。その中で，アートというのは１つのいい媒介物だし，また重要な内容でもある。その遊びというのを，子どもだけではなくて，大人が復権し，教師が中心になってそれをやっていく。また，地域でもそこに集ってくる。そこに共同性が生まれてくるということだと思いますが，それをまさに楚良先生が実践していると思うのです。楚良先生，遊び心というのは一体どこからくるのだろうというご質問がきています。こうやって言われてみると，私たち大人ももっと遊び心を持ちたいと思うのですが，ついつい，また今日帰ってしまうと，遊び心を忘れてしまうのです。一体これをどうやって私たちの中に維持するかということは，すごく大事なことだろうと思うのですが，その辺の秘密を曝露していただこうかと思います。

それから，これも重要です。そういった楚良先生のような存在というのは，ユニークであると同時に，では楚良先生がいなくなった後，その学校はどうなるのだろう。中延の森はどうなったのだろう。これもよく語られることです。１人の存在がス

ーパーマンであったりするだけではいけないのだろうし，もちろんそれをつないでいく，広げていくということがあるし，実際，そういうことがいくらもあったと思うのです。その辺のことをお話ください。

あと，先ほどの苅宿先生の質問は，アート教育と社会，「地域社会」を結んで，コミュニティを形成する。そこにアートの教育，狭い意味でのアート教育を担う美術や音楽の先生というのは，どんなところに役割的な配慮があるのだろうということですが，ご自身のことでお話くだされば と思います。

子どもたちの反応が遊び心を維持させてくれる

○楚良　遊び心というのでしょうか，これは性格なので。要するに好きなのです。さっきみたいにレーザーポインターを見ると，これで遊びたくなる。遊び心を保たせてくれているのは，日々のそれを楽しいと受け取ってくれる子どもたちの笑顔であり，反応であり，明るいだけとは限りませんが，それをもっと破壊的な方向に転換していく子どもたちの様子とか，そういうところに魅力を感じているというのが，１つ大きな，それを維持してくれることなのではないかなと思います。それは同時に，私をこれ以上成長させない原因にもなっているのかなと思ったりもしますが。

あと，私がいなくなった後，中延小はどうなっているのでしょう。いま東京都の教員は，３年～６年ぐらいで異動しなければいけないことになっておりまして，これをもっと異動しない方向にどなたか働きかけてしていただければと思いますが，こればかりはもうどうにもなりません。

○奈須　一般的に先生が異動していくということが，学校の実践のある意味の継続性とか発展性とどうなるのか。もちろん異動しないと，固着して駄目になってしまうこともあるのでしょうけれど，そんなことを先生はお悩みではないか。何か感じられたことなどあればと思ったのです。

人間の森（アートネットワーク）が重要

○楚良　確かに異動していく良さ，こちらの勉強としては，いろいろなところでいろいろな人たちとかかわっていける良さ，自分でも成長していけるということがあるのですが，１つ私はいろいろなところで訴えているのは，先ほど時間がなくて，終わり５分で大事なことを言いそびれてしまったのですが，私は私で，どこへ行っても，ネットワークを大事にしていこうと思っているのです。いまの学校に行っても，中延の森とちょうど同じようなスペースのセンゾウ山という森があるのです。私はあのレポートの最後に，「森ごと異動したいと思ったくらいだ」と書いたのですが，行ってびっくり，本当に同じ規模の森があったのです。これはいろいろできるかなと思ったのですが，実は全然いろいろはできませんでした。なぜかというと，気がついてみると，やはり森でできたことというのは，その，森というのはスペースであったのですが，そこでできた森というのは，実は木が茂っている森でもあったけれど，人間の森だったんだなと思うのです。その人間の森を大事にしていけば，どこへ行っても。ですから，最近，子どもの育ちとアートネットワークということを申し上げているのですが，このネットワークを私が常にいろいろな方たちと持ち続けることで，どこへ行ってもそれを共有する人たち，いつでも手を携えて協力していける人たちがいるということで，その学校としての共同体とはまた別の意味で，「子どもの育ちとアートネットワーク」という共同体を１つつくっていまして，それを広い範囲でいろいろな形をつくっていくということですかね。そのぐらいしか私にはできないのですが。

始まりの永久革命－いつもいつも始まり

○佐藤　一般論ですが，いいですか。要するにある人が異動したらどうなるか，それが終わってしまったらどうなるかとかよくあるのですが，私は教育というのはそういうものだと。人が替わったときに，その替わった人がつくればいいのです。例えば楚良さんが異動して，別の美術教師が来たときに，楚良さんの延長だったらおかしいですよ。そういう学校であってほしくないです。だから，教育というのは，何かを建設する仕事ではなくて，あまりにも教育は建設で決めた場で語られていることの弊害を私は思うのです。

そうではなくて，むしろ私は，「始まりの永久革命」と言って

いるのですが。いつも，いつも始まり。ただし，もう１つ重要な問題は，学校は歴史を持たなければいけない。学校は学校として，楚良先生がいる，ほかの先生が来た，そういうのが織りなして１つの歴史をつくっていく。それを大切にしていけばいいのではないかなという，この両方がありますね。これはあくまでも私の意見ですが。よく「佐藤さん，いろいろな学校に行って改革して，それらが全部つぶれていったらどうするの」って。「当たり前だよ。つぶすためにやっているようなもので」と。そうでなければ，学校は活きていかない。そういういろいろなことが響き合うのが改革であって，何かいいものができたらそれをほかにも広めようとか，そういう発想というのは，やはり少なくともアートを語る人間の発想ではない，と思います。

○奈須　それはむしろ近代の大量生産的な発想ですね，画一的な。

楚良先生の実践で，もう１つ質問が来ています。「楚良先生の授業実践，とても楽しく拝見しました。他の先生，学校，保護者，まちの人などと協働する工夫や難しさ，いくつか出たと思うのです。これについてお話いただければと思います」。要するに地域の人やいろいろな方と広がっていく，また，同じく学校の先生，さっき説得するとか，いろいろ軋轢もありますね。あるいは，今後作品のテーマや活動を地域に広げていく。地域に材を求めているということにはすでになると思うのですが，地域に広げていくというようなご予定はありますかというご質問が来ています。

その学校でどう位置づけるかが難しい

○楚良　難しさは付きものだと思いますが，全体的にいって，それほど難しいというよりは，むしろ，もうちょっとやればこうなるのにと思いながらも，時間がなかったりとか，こちらがくたびれきってしまったりとか，そういうことのほうが問題で，とにかく，特に保護者は子どもと一緒に何かものを作っていけるということに対しては，非常に協力的です。ですから，その辺であまり難しさを感じません。

ただ，例えば学校をとってみますと，例えば私のいま勤務している学校は，体育・健康教育の伝統的な教育を展開しているところですので，非常にその力も強くて，そこの中で，私が中延小学校でやったようなアートの実践をすることは，非常に難しいと思います。むしろささやかな１つの柱として息づいていくのがベストだと思うのです。それをひっくり返して，学校中図工が盛んな学校にしてやるなどということは思いませんし，それがその学校にとっていいことだとも思いません。ですから，そういったことの難しさというのでしょうか，その学校を大切にしながら，ここでこういうものをどこに位置づけてやれるかというところを見極めるのが，難しいといえば難しいかと思います。

いろいろな下準備が整いまして，図工室その他の活動でも，いろいろな方たちの協力を得て，もっと外へ出て行ってやるような準備が，やっと整ってきましたので，これからはもっとやっていくことになります。ただ，この１年半，行事のときにはいろいろできるのですが，やはり人のネットワークができていくのに時間がかかりますから，それはじっくりと取り組みたいと思っています。

評価をどう考えるか

○奈須　今日の質問の大きなものの一つに，評価の問題が出ています。特にアートにかかわることではどうするかという難しい問題。評価の意味にもよりますしね。

あとは文部科学省のほうから出た基準準拠評価ということの波もあったのだと思いますが，楚良先生への質問。「評価はどうなさっていますか。あるいは，学校での評価が，子どもの創造力を萎縮してしまうというようなことはないのだろうか」。評価の機能のやり方の問題ですが，評価をどう考えるか。例えば育まれた想像力や創造力を表現の結果以外に先生が見取られる方法。作品以外です。もちろんプロセスとかいろいろあると思うのですが，特に先生が注目されているお子さんの育ちの見取り方，これは佐藤先生にも是非伺いたいと思いますが，作品の評価はどうやるのか。それから，子どもたちに，作業や制作の意味を伝えるというのですかね。小松さんからの質問ですが，ちょっとご趣旨をお話いただければ。

○小松（名古屋大学）　私は，地域で子どもたちに建築を教えたり，いろいろデザインを提案するということを一緒にやっているのです。子どもたちは楽しくやって帰って行くのですが，そのときに，ここで何か作ってもらったものとか，我々が考えた意図みたいなことをちゃんと子どもたちに伝えなくていいのかという議論が，仲間の間で必ず出るのです。子どもたちが楽しく１日過ごせばいいではないかという考え方もあるでしょうし，もう少しいろいろな意味を，わからないかもしれないが，伝えてあげる努力をしたほうがいいのかなと思ったり，いつも迷っているものですから，そんな工夫や，そういうことを考えていらっしゃるのかどうかということをお聞きしたかったのです。

○奈須　社会教育ではいつも問題になることですし，図工か何かで言えば，造形遊び以降をどう考えるかということはよく議論になることです。イメージ的に言語的に概念化して伝えるということ，それがいいのかどうかということだと思いますが，これは，２人の先生，両方とも，できればいろいろな角度でお答えいただきたいと思いますが。評価をめぐる問題ということです。

評価とは自分がやったことを客観的に知る手だて

○楚良　評価について話し始めますと，残り少ない時間ではとても足りませんので，簡単に大雑把なお話だけ。評価というと，評定と勘違いされているところがありまして，通信簿の成績がどうなるかというようなのを評価と考えている方が世間一般で相変わらず多いので，そうではないということです。要す

るに自分がやっていることを，自分はどうだったのかと，客観的にこういうことを君はやっているよ，こうだったよということを，客観的に知る方法の１つが，評価だと思います。アートについては，点数化するということ自体に非常に無理があるということは，いろいろな方がおっしゃっています。

ただ，ぎりぎりの選択で，例えばいまは４つの項目についてＡＢＣを一応つけなくてはいけないことになっているわけですが，それが今度廃止されますと，いくつかのよくない面もあるのです。例えば，小学校６年生あるいは中学校３年生ぐらいで，美術や図工をとても楽しみにしている子が，頑張れる権利を奪ってしまうことになりかねないというところも１つあるわけで。中学校３年生なら，もっと受験勉強しなければいけないのではないか，美術で絵なんか書いていては駄目よ。でもね，絵で５でもとれば，都立高校に有利なんだと，いままでは言えたというのですね。そういうような守られ方というのは，ある意味でよくないのかもしれませんが，そういう現実もあったわけです。要するに，図工や美術，音楽もそうだと思うのですが，この点数にある程度表れているということが，最小限守っているというのも，これは１つの現実であります。

ちょっと話がそれましたが，評価は自分がやったことが，「あっ，やってよかった」と思えるような手だてです。具体的にいうと，造形遊びの中では，「あっ，あいつ，面白い砂の山作ったよ。俺も真似してみようかな」，「あの子，あんなすてきな光のクモの巣作ったよ。私もあれと一緒につなげてみようか」というようなところに評価の原点があるのだと思うのです。そこでやはり日常的に，「あっ，君のここ，いいね。すてきだね。今日頑張ったね」という，日常的な会話の中から評価が始まって，その１つが，学期に一度もらう通知票で，ちょっと前までは全部Ａをつけていた先生も実際にはいたわけですが，そういうことは許されない時代になってきました。この辺は，東京都図画工作研究会の会長の鈴石先生がいらっしゃっていますので，ちょっとお答えいただければと思うのですが。

○鈴石（東京都図画工作研究会）　昔，中学の音楽の先生がオールＡをつけて大問題になりました。文部省の中でも，10年ぐらい前は，音楽や図工はもう評価しなくていいという論議もあったようなのです。同時にそれは，評価がなければ，もう音楽と図工はなくてもいいみたいな論議もあったのです。これは矛盾ですね。いま楚良さんが言うように，私も評定評価をするわけですが，ほかの教科と基本的に違うのは，なるべくＡだと。Ｃは「何々ができない」。これが絶対評価のＣなのです。Ｂは，「概ねできる」。Ａは，「すごくできる」です。絶対評価というのは，みんなＢに到達すればいいのです。だから，ほとんどＢをつければいいのです。だから，Ｃは，図工の場合にはあまりつけないように努力する。つまり，私がいけなかったと。Ｃをつけてしまったのは私のせいだというふうに思うのがいいのではないかと思います。

評価できるもの，評価すべきでないものがある

○佐藤　評価をめぐる問題をややこしくしているのは指導要録なのです。文科省が決めている指導要録。これは教師の立場ではもう背くわけにはいきませんから。更にややこしくしているのが，今度は学校で出している「あゆみ」というもの。これは必ずしも対応していないのです。これは情報公開によって今後はやはり対応せざるを得なくなってくると思いますが，更にややこしくさせているのが，調査書重視の入学試験です。

しかも文科省は，要するに観点別評価というふうに，関心・意欲・態度というのはご存じでしょう。私はよく言うのですが，何事にも関心を持ち，何事にも意欲があり，何事にも態度がいいやつは，アホだと言っているのですが，要するにアホをつくる教育をやっているのです。そのことに誰も気がついてないわけで，そういういくつもの問題が出てくる。しかも，今度はその評価に合わせて授業がつくられなければいけないという，本末転倒が起こっているわけです。

そもそも考えてほしいのは，いい教育は，おそろしく評価はしていないのですね，そういう教師は。よく頑張ったからよかったねとか，ここはこれでよかったよというような教師に，ろくな人はいないのです。また，育たないです。特にアートのようなもの，つまり創造的な能力を育てるいい師というのは，いろいろなモデルを考えてみてください。これまでの，例えば芸術家とかで，いい弟子を育てたとか，音楽家でマスタークラスのレッスンをやっているとか，ああいうモデルを見てつくづく思うのは，ほとんど評価してないということが重要だと思うのです。

それはなぜかということですが，これは非常にはっきりしていまして，テクニックとか知識は評価できるのですが，アートにとって評価は別なのです。そこのところをはっきりさせないと。こういうことを言うと，全く評価しない先生が出てくるので困るのですが，つまり，いろいろな美術にしろ音楽にしろ，決してアートだけで成り立っていないでしょう。テクニックもあれば，知識もあるのです。それらは全体としてどこが評価できて，どこが評価すべきでないか。別の形が必要かということをまず考えなければいけない。でも，いま小学校・中学校ぐらいで言えることはあると思うのです。私がかかわっている学校では，これは情報公開が前提です。子どもと親に対するメッセージとし評点ではなく言葉のメッセージで伝える評価を行って

います。これは芸術関連，例えば音楽とか美術とか，技法だから家庭科や体育で実施しています。これについては言葉で示すという，数字で評点をつけない改革をやっているのです。なぜそういうことをやるかというと，これらの教科，つまりアートにとっていちばん子どもに必要なのは，好きになることなのです。嫌いになるというのがいちばんこわい。いやになるのもこわい。だから，好きになるための評価だというふうに，目的をはっきりさせるのです。これがまずできることです。

ただし，学校の方向としては親に対する情報公開をやらないと，一方では指導要録で隠しておいて，実際には，ということになりかねないので，偽善になりますので，これはセットで置かないといけないと思います。でも，１つ，これはできるでしょう。

本物と偽物を見分ける力

○佐藤　もう１点だけ言いたいのは，実はアートにとって評価で大切にしなければいけないものもあると思うのです。それは何かというと，本物と偽物を見分ける力です。これは幼稚園のころから育てていかなければいけない。何が本物なのか，何がすごいのか。何は格好いいけども偽物なのか。その教師自身がいつも本物に接していて，本物の世界をきちんと理解していることが何よりも大切です。創造的な仕事ができるということのいちばん重要なことは，本物と偽物をきちんと見分けることができるということです。

それは我々の研究の世界においてもそうです。きちんと本物の仕事は本物の仕事で見える。格好よく書いてあろうと，素朴にやさしく書いてあろうと，本物の世界というのはすごいですからね。そういう感覚を教師が持っているかどうかが決定的であって，それをもし持たない教師は，少なくともアートの教育は教科書どおりにやってほしい。それ以上のことはやらないでほしいというのが私の意見です。

○奈須　いま思い出したのは，私，実家が和菓子屋なのですが，いい和菓子職人というのは，和菓子が作れる技術があるのではなくて，おいしい和菓子とおいしくない和菓子を一瞬で見分けられる力だというのを子ども時代にしつけられましたが，なるほど，そうだなと，いま思い出しました。

非常に具体的な質問ですが，佐藤先生に，先ほどのレッジョ・エミリアの幼稚園，箱庭のテーマは，子どもが自由に発想したのか，ちょっとレッジョ・エミリアの具体的な話ですが，あのテーマは誰が発想したのか。それから，これは小千谷の実践ですが，さっきの「夕焼け小焼け」の歌ですが，ダイナミクスがあまりなかったのではないかというのですが，これはどうですか。具体的ですが，本質的なことに意外とかかるかもしれないので。

○佐藤　後の質問から答えますと，あれは録音で音が飛んでしまっているのです。デジタルで撮ったものもあるのですが，今日は８ミリビデオのテープで録音したもを聞いていただいたので，実際は全然違います。雰囲気だけはわかってください。

○奈須　本物はすごくダイナミックなのですね。また，そういうことに触れるということが大事なのですね。

○佐藤　そうです。音響に詳しい人には音が飛んでいるのが感じてもらえたと思う。演奏でも，音の横の広がりを見ると，結構理解できると思うのです。

カリキュラムは発展できることが大切

○佐藤　イタリアの幼稚園のテーマですが，あの中にある太陽とか工場というのは，繰り返し繰り返し登場してきているのです。だから，子どもが決めたというべきなのかどうなのか，私はちょっとためらいます。つまり，そういう作品を，自分たちの先輩が，同じようなテーマで20年ぐらいやっていますから。そういうのを見ながら，アイディアを持って。しかし，同じのは作らないです。その子たちはバリエーションをつくっていきます。それが積み上げているということだと思うのです。だから，カリキュラムについて，私は，子どもが作ったのか教師が作ったのか，どうでもいいことだと思っているのです。

日本では割合カリキュラムは子どもがつくったものがいいものだという神話があるのです。この神話を持っている国は，不思議なことに韓国と中国と日本だけなのです。ヨーロッパあるいはアメリカなどの文化の中では，教師が作ったか子どもが作ったかなど，どうでもいいこと。むしろ教師主導でやっています。というのは，子どもから築いたもの，子どもとつながりのあったもの，これは当然のことでしょう。子どもと無関係のものをやっては無意味です。子どもが夢中になれないようなテーマを決めて，それをするのは全く無意味ですが，子どもから言い出したからいいということには全然ならないと私は思っています。

なぜかというと，学びにとって必要なのは，それにいかに没入できるかということと，いかに発展できるかということでしょう。そういう考え方です。だから，レッジョに関しては，やはり教師から提案したものが多いです。ただしその展開は，１回１回全部別なのです。

例えば，「群れ」という結構面白いテーマがあります。まちの真ん中に，日曜日見ていると，人がいっぱい歩くでしょう。それを子どもたちが，「あっ，群れって面白いね」って眺めているわけです。よし，群れをやろうって。みんなで幼稚園の真ん中に集まって，群れをつくろうって歩くのですが，全然群れにならないのです。いつの間にか行列になったりとか。群れという概念が全然できないわけですよ。そうすると，群れって何だろうってテーマになるわけです。

そうすると，ここは先生の出番です。ヒントとしていろいろな人が集まっている写真とかビデオとか見せていく。それで，群れた部分と，例えば政治集会なんかを。これは群れではないですよね。そうすると，子どもが，「あっ」と気づくのです。群れというのは，目と目を合わさないで歩いている姿だと。ではそれでやってみようというので，みんな，目と目を合わせては駄目よ，挨拶もしては駄目よということで，ずうっと歩く。「あ

っ，群れができた」となるわけです。それを今度は粘土で表現する。その次のテーマになったら，ではコミュニティって何だろうとなるわけです。群れではない。コミュニティって何だろうと。こういうふうに発展していくのです。だから，１つの素朴なところからスタートしたとしても，本質にいっているでしょう。それはやはり，まちづくりとアートと結び付けるものが思想としてあるからだと思うのです。

○奈須　ありがとうございます。非常に本質的なことだったと思います。フロアから，いくつかご質問なり，ご提言をいただければと思います。

遠くから通う小学校では，まち学習の題材選びも難しい

○細田(崇)(東京大学)　私は建築を専攻しております。統廃合する小学校に興味がありまして，いろいろ調べていくうちに，八王子市では小学校をつぶすに当たって，反対運動が起きない小学校があると聞き，実際に見に行ってきました。そうすると，確かにつぶすことに反対を唱えたくならないような小学校だったのです。普通にイメージする小学校より、まちの中での地位が低いような気もするのです。ちょうど筑波大学附属小学校の先生がいらっしゃるので伺いたいと思います。先ほどコミュニティの話が出ましたが，遠くから通ってくる子どもをたくさん受け入れるからこそ得られる地域での地位というのは，たぶん地域に根ざした小学校とは違うと思うのですが、生徒が遠くから通ってくる小学校というのは地域の中でどういった可能性があるとお考えですか。

○町田　筑波大学附属小の場合は，東京23区と，西東京市，和光市という，かなり広い範囲で，通学時間は平均して30～40分ぐらいです。３年生になると，自分たちの地域を学ぶ「まち学習」などもありますが，やはり共通で話題に乗せていく共通の体験のある所といいますと，住んでいる場所ではなく，学校の周りになるわけです。まちへ出て行って，まち探険などをして，自分が住んでいる所ではないが，学校の周りの地域の勉強をしていくわけです。確かに，住んでいる所，自分の生活のある所を，みんなで共通に学ぶということは，非常に難しく，社会科や家庭科もそうですが，授業を組むときに，子どもたちにどういう課題意識が芽生えるであろうかというところで，悩みながら検討しています。

例えば私は家庭科なので，５，６年の授業を受け持っているわけですが，家庭も地域に開いているわけですから，家庭科でも地域のことを考えた，地域への生活を含んだ学習をするわけです。それを扱うときに，やはり子どもたちの住んでいる地域，それぞれの生活を出し合っても，なかなか共通の話し合いができないので，学校の付近で子どもたちほとんどが利用している駅について，駅の改修工事に当たって，どんなふうに自分たちは駅を使っていきたいか，駅というのは一体自分たちにとってどんな所だろうかとか，そういう学習で共通のものをやってみたりしました。あとは，自分の生活の仕方ということで，それぞれが自分の地域での家庭生活を教室で共通に出し合うという学習しか実際には組めません。悩みながらやっております。

学校選択制の前に学校と地域についてもっと議論を

○細田(崇)　質問を加えさせていただきます。広島市と品川区で，学校選択制という動きがあります。いま「悩み」とおっしゃっていた部分をもろに含んでしまうような形で改革が進む、片やニュータウンでは，学校を中心にコミュニティを組まなければいけないような現実が，佐藤先生のお話だとある。そうすると全然違う方向に向いているベクトルのように見えるのです。それは「地域性が違うから，当然ベクトルは違っていていいのではないか」ということなのか，それとも，「違う方向に見えるベクトルは，実は同じ土俵に乗っていて，その表出として違う」ということなのか，どちらだと先生は捉えられますか。

○佐藤　どこが違うベクトルだと見えますか。

○細田(崇)　いまの八王子と学校選択制の話に限りますと，地域との結び付きを強くしなければいけない八王子と，地域との結び付きを崩してしまう学校選択制というような見方で方向が違う，と見ています。

○佐藤　学校選択制の問題は深刻で，現在も導入しているところと，導入がすでに予定されているところというのは，東京23区でいうと，20区までもう予定が入ってしまっているのです。

ここでいくつかの重要な点をいうと，実は，学校選択の自由化というのは，その地域の未来を決定するものすごく大きな要素でしょう。にもかかわらず，このすべての事例にわたって，市議会で一度も話されていないのです。なぜそういうことが起こるかというと，校区というのは条例になっていないのです。なぜ条例になっていないかというと，学校選択など想定してなかったわけです。起こり得ないことだという前提のもとに，戦後の学区制というのは成り立っているのです。ですから教育委員会が決めれば，バーッと走り出すという，こういう状況なのです。

私は，学校選択を入れるかどうかの問題に関しては，代案もあるのですが，今日はそこは省略しますが，少なくとも地域の未来を決定するという意味においていい機会なので，学校と地域のあり方をきちんと政策問題として議論し合うという，最低それはやってほしいと感じますが，そんなことなしで事柄が起こってしまっているわけです。もう23区については，すでに何十パーセントかにわたって越境が実態化していたわけで，現実化している。これは東京の特殊事情です。

風景に子どもが登場しない地域が生まれる危険

○佐藤　まずそういう問題として考えなければいけないのですが，ここから考えなければいけない問題として，あえて２つ

言うと，１つは，日本は都市空間の政策がないのです。こちらのほうが問題で，教育政策の問題以上に，都市政策の問題が全くないまま都市がつくられてきた。だから，私は，東京は都市だと呼んでいません。単なる人の集合。都市というのはこんなものではないです。もっともっといろいろな文化を生み出すものです。ところが，現在の東京の都市というのは，文化不毛です。特に象徴的に表れてくる問題として，その地域から子どもがいなくなったらどうなるかということを想定してほしい。つまり，いま学校選択制で起こっている事態というのは，子どものいない地域がどんどん都内に生まれているのです。風景の中に子どもが登場しない地域というのは，極めて危険な地域なのです。無機的な地域になります。そういうふうな地域を我々は東京都内に求めるかという，こういう議論を，もっともっとすべきだと思うのです。ですから，答えからいうと，やはりコミュニティというものを大切に考えるのか，考えないのか。その点では，２つは対極した動きですが，同じだと思っているのです。学校選択制は、極端に言えばコミュニティなどいらないという発想です。だから，そういう社会というものを我々が求めるかという，ここを問うているのです。私はコミュニティのない社会などというのは，おそろしく無機的で，空虚な，まさにルイス・マンフォードが批判したような社会でしかないと思っています。

ただ，コミュニティづくりの中で，学校がどういう機能を果たすべきか。現実の学校がそういう機能を果たしているかどうか。要らないと言われるような学校になっていないか。そのチェックはもちろん必要です。問題があれば，やはり根本から考えなければいけないと思います。だから，学校建築にしろ，都市の都市計画にしろ，一切コミュニティづくりという発想が，これまでなかった。それでここまできてしまったという問題のほうが深刻だと思います。

○奈須　住教育フォーラムらしい話に方向が向かってきました。関心の強い方もおありだと思いますが，また，そういったことにアートということが非常に重要な形になるということが今日のモデルだと思いますが，いかがでしょうか。苅宿さん，お願いします。

学校の建築と規模

○苅宿（大東文化大学，ＮＰＯ学習環境デザイン工房）

１つお伺いしたいのは，いまコミュニティと学校という関係が出ていますが，さまざまな新しい学校の建築があると思いますし，私は自分のＮＰＯの活動で，過疎地小規模校をいろいろめぐっておりますと，全校児童が８人しかいないところとかあります。そうすると，平屋で，校舎などなくて，普通の家かなと思うようなところとかあるわけです。ここで想定される学校とコミュニティの関係の中で，学校の建築とか，あるいは学校の規模ですね，とにかく，たくさん，1,000 人もいるような学校と，それから，何十人しかいない学校では，やはり行われている教育が必然的に違うと思うのです。楚良先生の実践などを拝見しても，あるキャパシティというものが，１人の教師が与えられるキャパシティはあると思うのです。そういうことを考えて，少しいろいろなご意見をいただければと思います。学校建築の建築のあり方と，それから，キャパシティ，規模の問題ですね。そこでちょっとご意見を教えていただければと思います。

○佐藤　日本の学校の規模は大きいのです。これをまず大前提に考えなければいけない。先日，私はフィンランドに２回調査に行ったのですが，フィンランドは，小学校は大体 60 人。あらゆる子どもが５キロ以内で通える範囲に学校をつくることと法律で決まっているものだから，３キロ以内までは通学バスを出す。３～５キロにはタクシーがつくという。だから，必ずある規模になってくるのです。中学校や高校も，130 人ぐらいの規模なのです。イギリスは，小学校の規模を 150 人ぐらいに決めています。なぜ 150 人ぐらいの規模かというと，それは，それ以上にすると，校長が１人１人の子どもの教育に責任を負えないからというルールなのです。

日本の学校は，校長が全然責任を負ってないということです。１人１人がいまどういう状態にあってとか，やはり学校というコンセプトを変えないと，これは駄目です。ただ，現実に大きいでしょう。これには２つ問題があって，大都市郊外は大きいのです。ところが，東京都と大阪府と神奈川県と埼玉県と兵庫県と京都府を外した小学校の平均は 130 人を割っているわけです。要するに圧倒的に日本の小学校は，実は小規模校になっているのです。でも，その一方で，都市圏のほうでは，ものすごい大規模校になっている。この現実があるわけです。それから，中・高は大規模校。

ここはコミュニティの規模というのをもう１つ考えなければいけない。コミュニティの規模というのは，私は 80 人～120 もしくは 130 人までだと思っているのです。学校がコミュニティとして成立するためには，いろいろな方法を私は提起していて，これは北海道では随分高校が採用してくれたのですが，学校の中にスクールズ・ウィズイン・スクール。１つの千何百人の学校の中を，百何十人のコミュニティに分けてしまうわけです，教師集団も，生徒も。その単位で学校を運営するという，こういう発想です。だから，建物を新しくつくらなければという発想もあるのですが，まずは，いまある学校を小さいコミュニティの集合体に置き換えていくという，この改革は，すぐにでもできることなのです。それで，必ず成功しているということが１つ。

もっと地域の大人と子どもが交わるような学校開放を

○佐藤　あと，学校建築の問題に関しては，そもそもコミュニティの中心だという発想でつくられていませんから，特に 60 年代につくった建物がひどいわけです。ところが，いまはコミ

ュニティのシンボルという学校が流行っていて，これも困りもので，例えば，小田原に小田原城みたいな学校をつくっていて。こういう傾向も，もう一方であるわけです。だから，その両方で本当に人々が集う場所としての学校の機能とは一体何だろうと。明治時代の学校は，いちばん地域のコミュニティのセンターだったのです。それは明治12年の自由民権運動までです。みんな学校へ新聞を読みに行っていたのです。だって学校にしか新聞がない。ある時期には時計を見に行っていた。学校にしか時計がないから，何時だろうと寄って行くわけです。それぐらい学校というものが持っているリソースが，いろいろな意味での地域の活動，文化活動だとか，そういうものをもっと活性化するようなことを考えるべきですよ。だから，教育だけで，子育てだけでつながろうという発想に立つのは，ものすごく狭いと思うのです。家庭科室で，例えばお料理のサークルをどんどんやっている。音楽室で，どんどん地域のママさんコーラスたちが使っているというふうになるといい。いまは学校開放といっても，体育館だけですからね。しかも，そこで子どもと大人とがいろいろ交わるような，そういう発想は始まっていると思うのですが，学校を，建築と同時に，内容においても進める必要があるなと思っています。

○奈須　地域のいちばんいいところにありながら，治外法権になっているという。集会法の改正以降，そういうことになっていますが，楚良先生，いまのお話で，是非お願いします。

○楚良　ちょっと私の専門とは外れる面もありますが，いちばん後ろにいらっしゃいます仙田考さん，学校のデザインをイギリスの大学院で勉強され帰国されたので，ロンドンのそういった事情などを含めてお話いただければと思うのですが。

学校環境を地域みんなで考えていく時代

○仙田（環境デザイン研究所）中延小のときに、森をよくしたいということで、少しですが関わらせていただきました。私は造園、ランドスケープを専門にしていまして、イギリスでは環境教育と造園の関係ということで、学校の校庭をいかによくしていくか。しかも、それを専門家がどのように設計するかではなく、子どもたち、先生、保護者、地域の方々の皆さんと、校庭をどのようにつくっていくかという点に注目していました。校庭というのは子どもたちの生活空間、しかも屋外でゆっくり休むことができる場所ということで、とても日常的な空間なので、その空間をどのようにつくっていくかということが、とても大切なことなのです。

学校建築に際しても、どういうものが求められているのか。子どもたちが生き生きと学習したり、生活したりできる空間はどういう空間なのかということを理解している方が関わることが大事だと思います。学校建築というのは建築の世界のなかでも、デザイン性を追及すればよいということではなくて、子どもたちが普段生活する空間ですから、子どもたちの動き、学習、それからコミュニティの活動拠点としても、学校が位置づけられはじめている。複合機能といいますか、そういうことも全体的に考慮して学校建築を考えていかなければならないと思います。

イギリスの事例をあまり具体的にお話できませんが、学校の規模は一般的に日本よりも小さいところが多いと思います。学校建築もそれほどきらびやかなものというのは多くはないです。規模というのは子どもの数の規模も小さいですし、敷地自体も狭いところもあります。校庭だけ格別広いところもありますが、狭いところが多いです。最近イギリスを中心に校庭がとても脚光を浴びていて、子どもたち、先生方、周りを取り巻くいろいろな方々が学校環境をどのようにしたらよくできるかを実際に一緒に考え、一緒につくりながら、ひとつの空間を育てていくという動きが大変盛んになっています。

日本でも学校ビオトープという、学校の中に生態ネットワークをつくる、池であったり森であったり、自然空間をつくって一緒に育てていく活動が広がっています。皆で考えていくことがとても大切な時代になってきていると思います。

○奈須　最後に，佐藤先生，楚良先生が教育に興味を持たれたきっかけを，アートの教育との絡みで一言お話いただいて終わりたいと思います。

たどり着いた小学校美術教師

○楚良　私は高校のときに吹奏楽にのめり込み過ぎました。将来は美術のほうに進みたい，もともとは美術の専門家になろうと思っていたのですが，全然その手の勉強をしないでいましたところ，美術大学の受験に失敗をしました。以後20代前半を，今でいうフリーターでしょうか，そのころはその言葉もなくそのような状態で過ごしました。その間いろいろなことをやりました。

教員になったのは10個目の職業で，9個目までの職業の半分以上はつぶれてなくなっています。学校の警備員，大井町駅前の阪急デパートの靴売場の店員，大田区の鵜の木の家具屋さん，その他諸々，私はずっと世間からあまり重要視されていない仕事をやってきました。それらはつぶれてしまったのですが，私は運良く教員採用試験に受かりました。資格は通信教育で取りました。教育実習に行ったところの校長先生が，とても素晴らしく切れる方で，私の研究授業を見て，私がしゃべった数よりもはるかに多いメモを取られていて，とても中身の濃いお話をしてくださいました。その方は後に全国中学校長会長になられて，中教審の専門委員まで勤められた方なのですが，その方がいなければ私は教員になっていません。ちなみに私の両親は教員で，父は45年間現場をはいつくばって，中学校の仕事を45年間も続けました。

父と母を見ていまして，教師だけには絶対になりたくないとずっと思っていました。何とかこれから逃れようと思ったので

すが，結局それしかやるものはなかったというのが現状かもしれません。最初は中学に勤めたのですが，小学校に転勤の希望を出したのは，両親が中学校で長年苦労してやっていた姿を見て，別のところで自分を試してみたかったからです。今の仕事は大変に気に入っていまして，とにかくこの仕事は一生続けていきたいと思います。

作りながら作り、作りながら崩す

○佐藤　よくわからないのですが，あまり自分で決めてきたというよりも，流れに乗ってきたというのが実情なのです。強いて言えば，父親は戦後すぐぐらいは英文学の教師をやりたかったらしく，その前は小説家になりたかったらしいのです。ところが敗戦状況の経済的に非常な混乱の中で，なりたくもなかった銀行員になったので，金融関係やビジネスだけはやめろと小さいときから言われていました。

それが１点と，もう１つは母親が病気がちだったこともあり，祖母に育てられました。私は小学校のときから多動で学校不適応で，中学校，高校まで不適応なのです。というか，私が不適応ではなく，学校が私に不適応だったのですが，正確に言うと教師に対する批判意識が非常に強くてなかなか馴染めない。ものすごくおとなしい生徒なのに批判精神だけは旺盛という，教師にとってはいちばんタチが悪いタイプでした。

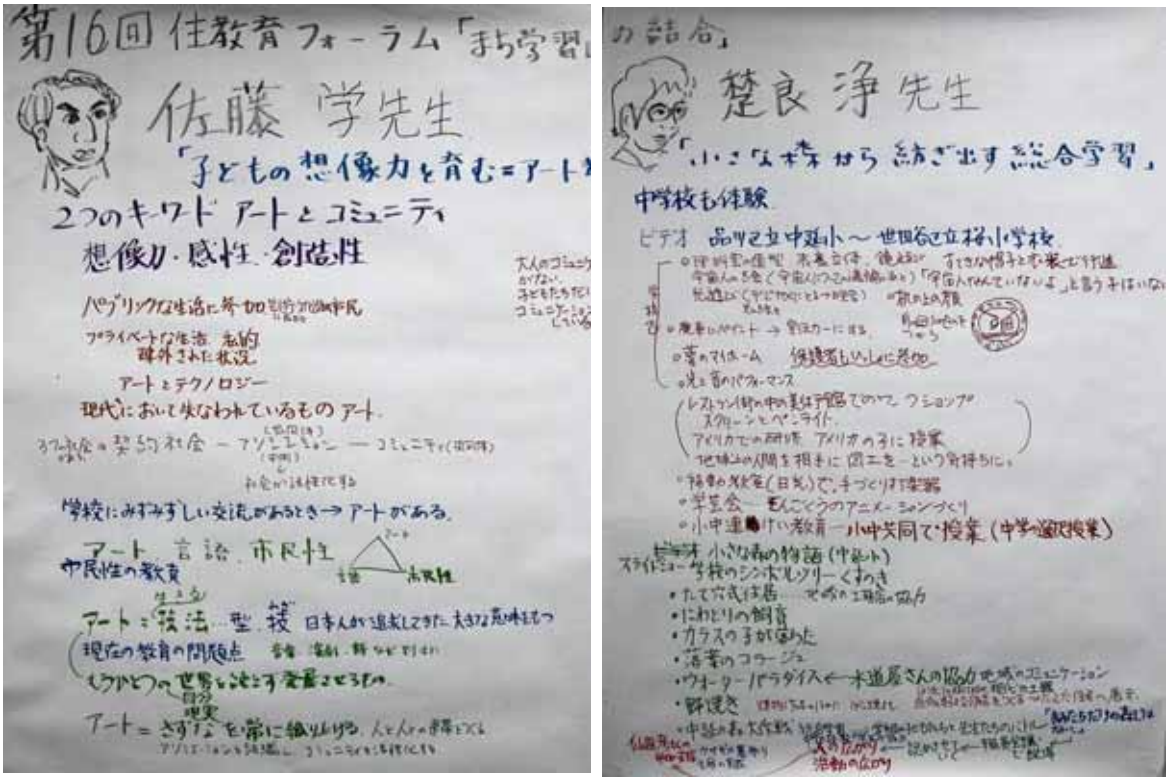
問題を起こせば起こすだけ，祖母がいつも私を呼ぶのです。何と和服で固めて，真ん中に短刀を置いて，「私がこれで自刃するか，あなたが反省するか」と言うのです。笑ってはいけないけれども，何度こうやってやられたかわかりません。笑っちゃいますけどね。祖母は幕末の洋学の医者の娘で、ずっと小学校教師をしていました。この精神を支えているのは一体何なんだろうというのをずっと思いました。今から思うと，祖母というのはすごく偉大であったと，いろいろな意味で尊敬しています。

私自身は大学に入って本当は教師になりたかったのです。ところが学生運動の時代で，卒業するとき単位が２単位足りなかったのです。しょうがないから大学院に行ったという経緯で，もしそのときに２単位あれば楚良さんに代わって芸術教育か何かやっていたと思っています。

今日の楚良さんの話の中で，いちばん大切な部分だと思ったのは，いちばん最後に言われた積み木の面白さというテーマです。これを私は最近すごくそう思うのです。建築的な発想ではなく，積み木的な発想で，私たちは教育を考え直す必要があるのではないかと思うのです。それは何かと言うと，デザインの思想ということなのですが，デザインとは何かというと，子どもの姿を見ていると，積み木の中にいちばん現われているのです。つまり作りながら作っています。作りながら崩しては作り，「あっ，そうだ，いいこと考えた」というように作っていきます。あれがデザインの原型だと思うのです。

その意味で遊びの教育も必要だし，アートも必要だと思います。その原型は多分，積み木遊びの中から培ってきていると思います。最後にお話になったのが，いかにも楚良さんらしくて，今日来て良かった，いい話を聞いたと思いました。

○奈須　もっといろいろなお話を聞いたり，議論をしたいところですが，この辺りでディスカッションを終わりにしようと思います。締めくくりとして，延藤先生にフォーラム全体をまとめていただこうと思います。



当日のファシリテーション・グラフィックより

［まとめ］

もう一つの可能性を発見する想像力

（財）住宅総合研究財団住教育委員会委員長
延藤安弘（NPO 法人まちの縁側育くみ隊代表理事）

２人の先生と，皆さん方の発話に，触発されることがたくさんありました。全体をまとめることはかなわぬことではありますが，アートとまちの関わりの意味付けのキーワードを７つすくい上げて今後に備えたいと思います。

相互にコミュニケーションできる力

第１点は「相互にコミュニケーションできる力」。これは冒頭で佐藤先生がルイス・マンフォードの言葉を引用され，まさに現代が愚かな私個人の中に閉じこもるという，プライベートな価値を重視し過ぎたために，ばらばらな世界をコミュニティにも，あるいは教育の現場にも起こし過ぎているのではないか。この相互にコミュニケーションできる力の回復，再創造というものは，人と人との間，学校と地域の間という様々なつなぎ目のデザインを，縦横無尽に進めていくというコミュニケーション能力に関する視点です。

内なる気づきを促すアート表現

第２点は，「内なる気づきを促すアート表現」。アート表現することによって，知らず知らずのうちにいちばん大事なことに気づく，内から気づくというのが人間の成長，育みにとっていちばん大事なことではないか。佐藤先生はいつも内から始まる，「始まりの永久革命」と話されていましたが，それと絡んでアザリオという精神医学者のキーワードを借りますと，starting from within という，常に内から始まるときに人は変わり，地域は変わるという，まさにこれは内なる気づきにつながることであり，アート表現というのは自己の中のいちばん気づかなかった大事なことに気づく，この仕掛けにアート表現の状況を変えていく重要な力があるのではないかということが語られていたように思います。

ぞくぞくするほど魅入られる遊び心

第３点は「ぞくぞくするほど魅入られる遊び心」。この仕掛けは中延の森をはじめ，楚良先生の仕掛けに，子どもたちが夢中になっている姿が，映像の中にくっきりと現れていました。人は現実という辛い中に身を置きながら，でも夢の世界というのは空々しいものでありますが，夢中になるというのはまさに夢うつつの間をうろつくことであり，夢とうつつの間をうろうろしながら現実を超える力を内から育んでいく遊び心，というキーワードが非常に示唆的でした。

うさんくさい均一性ではなく，ほんまもんの混ざり合いを大事にしよう

第４点目は「うさんくさい均一性ではなく，ほんまもんの混ざり合いを大事にしよう」ということです。佐藤先生が言われたようにまさに現代の社会は，極めて均一なるコンビニ文化という象徴的言葉がありましたように，計算され尽くされた世界，そして機能的にもゾーニングで極めて縦割りの同質性をもって良しとする。そのことによって何がほんまもんで，何が嘘かというのがわからなくなる。まさにほんまもんの発見の力というのは混ざり合い，聖と俗，美しいものと汚いもの，その混ざり合いの中に葛藤があり，トラブルが起こり，トラブルの中で人は何が事の本質かということを考えるチャンスを与えられます。

そういう意味で，葛藤を起こさない，トラブルを起こさないような均質性，同質性の世界というものはどうも嘘くさいのではないか。トラブルのないまちはむしろ死んだまちだという意味では，トラブルを積極的に受け入れ，それをエネルギーに変えるというしたたかさが実は人間的な生き方の中に，あるいはまちに内在する力を膨らましていくうえに，重要な仕掛けではないかと語られていたように思います。

リソースフルな祝祭活動は個人と共同体を育む

第５点目は「リソースフルな祝祭活動は個人と共同体を育む」。このリソースフルな祝祭活動は，個人と共同体の両面を同時的に進化させるというのは，新潟県小千谷小学校における佐藤先生の実践が，まさに地域の文化や歴史，人という最大の宝を活かしながら，文化を創造する。そしてお祭りという誰もが心湧き立つ共同作業の中で，自己と地域の未来に対する方向感を分かち合うという，このリソースフルな祝祭活動が，個人と共同体を育む重要な仕掛けであるということも，学校が地域から孤立している状況の中で，学校をそういったリソースフルな祝祭

活動の現場に，どのように変えていけるであろうかという視点も，未来への課題として提起されていたように思います。

妖怪の感覚表現は自己と世界の間を溶解させる

第６点目は，「妖怪の感覚表現は自己と世界の間を溶解させる」という，「何で妖怪やねん」とえらいややこしい話をしておりますが，妖怪というのが楚良先生のプロジェクトの中で，まさにお化けの顔をした子どもたちが鐘を鳴らし，楽器を打ち鳴らしながら，何か得も言えない世界へ侵入していく，子どもたちの心は開かれていくという情景描写がありました。

宇宙人はおるかおらんかわからんけれども，宇宙人を描いて見たら，めちゃめちゃおもろい宇宙人を子どもたちはああやって描き出すという，この世に存在するかしないかわからんような妖怪や宇宙人に関心を持つということが，子どもたちの五感をフル動員させながら自己と社会の間を溶解させる。ここにおいて「妖怪」と「溶解」は語呂合わせであるというのを気づいていただいているかどうかはわかりませんが。

クリエイティブな積み木のデザインでいこう

７点目に大事なキーワードは，「クリエイティブな積み木のデザインでいこう」。これは佐藤先生や楚良さんが指摘された大事なポイントです。構築的な１つの目標を持ってひたすら目的手段の体系を目指すという近代的方法論の枠組みは逸脱しようというのが「積み木のデザイン」の意味することです。それは，むしろ壊しながら作る，作りながら壊し，遊びながら作るという，このジグザグした，うろうろしながら周りと対話をし，もって予想もつかないようなところに着地できるという，むしろ漂流しながら，積み木をデザインしながら目標をお互いに見つけていくという，プロセスの楽しさというものを分かち合う状況づくり。このクリエイティブな積み木のデザイン，クリエイティブなクラフトマンシップという，この職人的な心のこもった手づくり感覚のある，一人ひとりの手技と心が連動するようなふるまいの連鎖の世界のデザインが，実は，子どもも大人も地域も変わる重要な仕掛けではないか，と語られていたように思います。

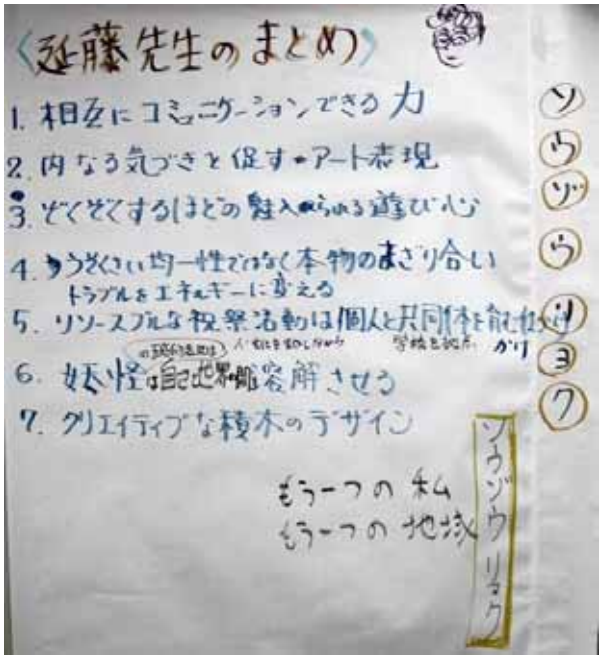
キーワードは「想像力」

以上の７つに尽きているわけではありませんが，ラッキー７ということで終わりたいと思います。頭文字をずっと読み上げてみると，相互にコミュニケーションの「そ」と，内なる気づきの「う」，ぞくぞくする遊び心の「ぞ」，うさんくさい均一性を超えようの「う」，リソースフルな祝祭活動の「り」，妖怪の「よ」，クリエイティブな積み木のデザインの「く」，韻をふんで，頭文字を束ねて縦に読んでみますと，「想像力」という，今１つの大事なキーワードにつながっています。

我々は僅かの時間に，なぜこんな「想像力」の翼が，広がるような状況を共有できたのかという不思議な感がします。これも２人の先生方の実践と理論の世界のなし得る技であり，佐藤先生が言われたように，想像力は日常世界の中に埋没しているようで，よく見てみたら，もう１つのポテンシャル，もう１つの可能性が発見できるというのが想像力である。いろいろコミュニケーションして試行錯誤しながら，しくじりもトラブルもエネルギーに変えていくというプロセスを楽しんでいくと，もう１つの自己の発見がある，もう１つの地域の力の発見があるという，オルタナティブな世界に人々は旅することに喜びを見いだすという，もう１つの私，もう１つの地域のエネルギーを発見するというたゆまざる旅していく心を，お互いに膨らましていくことが「想像力」ではないかと語られていたように思います。

一方，学校を巡る，あるいは越境制度を巡る悩ましい現実の問題が語られ，日本の現実がいろいろな面で閉塞感や非常にしんどい思いがある中で，「こんな理想的なことを言うてみても何も始まらへんやんか」と反論をされる方もいるかもしれません。もう日本はあかんと思うのも想像力，「そやけど日本はまだまだいけるで」と思うのも想像力。私たちの地域はもうあかんと思うのも想像力だけれども，私たちの学校や地域はまだまだ変えられると思うのも想像力。ネガティブな想像力でいくのか，ポジティブな想像力でいくのか，閉じる想像力でいくのか，開かれた想像力でいくのか，どっちやねん，というのが，いまひとつ問いかけられた重要な切り口ではないかと思います。

深い多様な洞察の世界に導いていただいた，２人の先生にもう一度拍手を贈って終わりたいと思います。ありがとうございました。



当日のファシリテーション・グラフィックより

住・まちづくりフォーラムかわら版　16　©
発行日　2004年９月９日（非売品）
(財)住教育委員会＝延藤安弘，小澤紀美子，木下勇，町田万里子，
細田洋子，奈須正裕
(事務局)永田一雄，平井なか，岡崎愛子
発行人　峰政 克義
発行所　財団法人　住宅総合研究財団
〒156-0055　世田谷区船橋4-29-8
TEL 03-3484-5381　FAX 03-3484-5794
URL:http://www.jusoken.or.jp
E-mail：jusoken@mxj.mesh.ne.jp